魔法大国の花嫁様！？

ルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法大国の花嫁様！？

【Ｎコード】
Ｎ４９７３Ｍ

【作者名】
ルナ

【あらすじ】
不幸な少女、相沢美冬は、世界を呪う毎日だった。
彼女は両親からも、村人からも愛されない。
そんな彼女が、魔法大国から花嫁として召喚された！？
人を信じられなくなった彼女に未来はあるのか！？

プロローグ　～世界を呪う娘～

相沢美冬（あいざわみふゆ）は、かなり田舎の方に住む、世界を呪っている少女である。

「世界が滅ばないかな」

最低十回は呟く毎日だった。

彼女は不幸体質である。生まれたころから不幸は始まっていた。なにしろ、人並み外れて醜い相沢夫婦のもとに、かなりの美少女が生まれたのだから。相沢夫婦は美冬を愛さなかった。

それどころか、最初から娘などいないかのようにふるまった。当然世話もしない。

美冬は足音を立てることも許されず、もしそれを破ろうものなら、鞭で何度もぶたれた。

泣いてもわめいても、かれらの気が済むまでぶたれた。顔だけは、一切殴られなかったが。

彼女が生き延びてこられたのは、今はクビにされていない使用人が、こっそりと育ててくれていたからだった。そのことがバレ、クビにされたが。

美冬という名も、彼女からもらった。

彼女は娘を亡くしたばかりだったらしく、本当の娘のように少女を愛した。少女のそばを離れる時も、ぼろぼろと涙を流して別れをおしんでいた。

相沢夫婦は村長だったので、それ以来、彼女は村人にさえ愛してもらうことはなかった。

村人は、彼女をいないもののように扱っていた。だが、彼女が村の畑や生け簀に手を出した時のみ、怒鳴り、殴りつけた。

村の子供たちは、そんな彼女に「遊んであげている」という、大義名分のもと、嫌がらせをしていた。中傷するのはまだいいほうで、蹴ったり殴ったり、いろいろなストレスのはけ口にしていたのだ。

美冬は逆らわなかった。ただ逃げただけだったので、子供たちは増長した。

一枚きりしかない真っ黒い服をひきさき、一足しかない木靴に穴を開けたりした。美冬は体中あざだらけで、破かれた袖や裾から痛々しいほどの痕がいくつも見えた。そんな毎日はいつまでも続いた。

相沢美冬は、十五歳になっていた。つやつやと輝く黒髪と、同じ色の澄んだ瞳、美しい顔立ちをしている。彼女は草を煮ただけで、何の味付 けもしていないスープだけで生きているので、まるで病人のようにやせほそっていた。

いじめはまだ続いていた。体中のあざも、毎日のようにつけられるので、決して治っていなかった。

「くせえよ、よるな、美冬！！　きったねんだよ、お前！！」

「え～、ひっどーい。駄目じゃーん、ホントのこと言ったらさあ」

「お前の方がひでえっつの」

「きゃはははっ！！　なんかいったらあ？　美冬ぅ」

美冬はなにも言わなかった。悪口もなにもかもどうでもいい。彼女の心は闇に縛られていた。

「なによ、その目」

「文句があるなら言えよ」
どんっと、美冬は突き飛ばされた。
地面に転がった彼女の後ろには、崖があった。
立ち上がりかけてよろめいた彼女は、そのまま落下した。
「きゃあああああっ！！」
「うわあああああっ！！」
悲鳴が上がった。もちろん、美冬のものではない。
美冬を落とした少年たちだ。
いじめをしても悪いという考えはないが、人を、何かを殺す、ということには抵抗を感じるらしい。
少年たちの中に、ひとつの考えが現れた。
埋めればいい、証拠を隠してしまえばいい、と。

少年たちは回り込んで崖下に行くと、美冬に土をかけ始めた。そのとき、美冬は生きていた。
だけど、何か言おうとも、体を動かそうともしなかった。
これですべてが終わる。私のひどい人生は終わる。
美冬は土がかけ終わる頃、土の中で笑っていた。

プロローグ　～世界を呪う娘～（後書き）

私の書くヒロインは、だいたい豊かな生活を送っているので、
不幸なタイプを書いてみました。
徐々に幸せになる予定です。

第一幕　～召喚された少女～

ここは、魔法大国フランジェール。
今まさに、秘儀が開始されようとしていた。
魔法大国の王族が、一生に一回だけしか使えない秘術をもちいたものだ。
儀式の中心にいるのは、五男のカイン・ルク・フランジェールだった。年は十五。
十人兄妹の中で一番の美形といわれて、国民から人気がある。
灰金色（アッシュブロンド）の肩までの髪、
いつもきらきらと瞬（またた）く金の瞳。
顔はどちらかというと中性的だった。
髪をのばせば、女にも見えるだろう。

王子は美しい声で呪文を唱え始めた。
妹姫・フィレンカ・ルア・フランジェールが、目をきらきらさせて未来の姉の登場を今か今かと待っていた。
彼女は五女であった。
この儀式は、異世界から花嫁を召喚する、というものだった。
はるか昔から、ここではこの秘儀のもと、王族は娘と結ばれるのである。

しばらくののち、呪文は終わった。
王子が立っている台座が、虹色のきらめきを見せる。

やがて、一人の少女がふわり、とその場に現れた。
美しい娘だ。その美貌は、全員が息を飲むくらいだった。
自分は美しいと自負する侍女や、姫君方も、その美しさに見とれていた。が、悪いところが無い訳ではない。
少女の肌にはところどころ痣(あざ)があったし、
美しい黒髪はほつれていて、服はボロボロだった。
王子は、少女の様子を悲しく思うのと同時に、
愛しさがこみあげてきた。
この少女を、王子は瞬時に愛してしまったのだった。

相沢美冬(あいざわみふゆ)は、いいかおりで目覚めた。
頭がぼうっとしていた。立ち上がりかけ、痛みで
呻く。ここはどこ？　天国？　それとも、痛みが
あるから、地獄？　でも、地獄ってこんないいかおり
がするのかしら。
美冬は訳が分からなかった。今彼女が寝ているのは、
バラの香りの香水がしみこませてある、ふかふかの
寝台だった。服も、着ていたはずのものではなく、
真っ白くて薄い、ワンピースのようなものだった。
今までとは、全然違う目覚め方だ。
美冬は、いつも子供たちに起こされるのが定説だった。
いつも堅い床の上に、どこかから取ってきたダンボール
をしいて寝ていた。なのに、これは一体どういうことだろう。
と、いきなりノックの音とともに、扉が開いた。

扉を開いた人物は、びっくりしたように目を見開いていた。
美冬の家に元はいた使用人と、こちらの方が衣装は高級そう

だが、だいたい同じような格好だった。
美冬は思わず身構えた。彼女は天使かもしれないと思ったのだ。
「あらあら、お譲さん、どうしたんですか？　傷は痛みますか？」
美冬は体から力を抜いた。彼女は、どことなく、雰囲気が育ての親に似ていたのだった。
そして、自分の体を見てみると、包帯がぐるぐると巻いてあった。肩や腕、頭にもまいてある。ミイラとはいかないが、もう少しでミイラ風になるところだった。
「傷を癒してさしあげたかったんですが、昨日は医療班がいなかったんですよ。今日は癒せますよ」
「ここ、どこなの？」
かたい声が彼女の口からもれた。
ああ、と四十代くらいの女性は頷いた。
「ここは魔法大国フランジェールの離宮ですよ。フィレンカ様と、カイン様と、王妃様がお住みになっています。
私は、メイド頭のミステルと申しますわ」
「ミステル！！」
美しい声が聞こえるとともに、高級そうなドアが吹き飛んだ。
美冬の目が、こぼれおちそうなくらい大きく見開かれていた。
飛んできた破片が、美冬の肌に傷を刻む。
美冬は衝撃を感じて黙り込んだ。ここは死の世界ではない。
傷を負うのだから、どこか別の世界である。
「カイン王子！！　魔術は控えなさいと言っているでしょう！！
お譲さんがびっくりしているじゃありませんか！！」
「ごめん、ミステル！！　と、そこの黒髪の君。驚かした？」
「ここは、天国でも地獄でもないの？」
「え、違うけど……」
「なんで余計なことしたのよ！！」
いきなり怒鳴られ、カインは目を見開いた。
「あたしは、もう生きていたくなんかなかったのに！！

やっと、あんなつらい人生に終止符がうたれたのに！！
なんで、なんで、余計なこと！！」
　言ってから、美冬は身構えた。殴られるだろうか。
それとも、中傷を投げられるのだろうか。
　が、王子は、美冬が考えたことはしなかった。
ただ、悲しそうな顔をしていた。
　ふわり、と王子に抱き寄せられた。
　美冬は目を見開いた。今まで、男にそんなことをされた
ことはなかった。彼らは怒鳴り、中傷をし、暴力を
ふるうばかりだった。
「辛い目にあってきたんだね、でももう大丈夫だよ。
ボクが君を愛するから。大事な、かわいい、ボクの花嫁」
「花嫁！？」
「ミステル、彼女に話していないの？」
「今話しますわ。古来より、ここの国では、花嫁を
異世界から召喚する風習があるのです。それによって、
召喚されたのが、あなたなのですよ」
　美冬は首を振った。どんっ、と王子を突き放した。
王子は首をかしげて、なぜこんなことをされたのか
分からない様子である。
美冬はキッと彼を睨んで叫んだ。
「このあたしが花嫁！？　信じないわ！！　信じて
たまるものですか！！　どうせまた、だますのでしょう！？」
「だますってなんのこと」
「あたしはもう、誰も信じないって誓ったのよ！！」
　美冬だって、おとぎばなしを読んでもらったりして、
いつかは自分にも王子さまが迎えに来てくれる、と
本気で思っていた時期があった。
　ラブレターをもらい、うかれて書かれていた場所に行った。
が、いつもでまっても誰も来なかった。

あとで、村の子供たちにだまされていたのだと知った。
　お前なんかに、王子さまが来る訳ないだろ、とからかわれた。
幼かった美冬は、かなり傷ついたのだった。
すっかり心を閉ざしたような様子の少女に、
カインは困ったような顔をするだけだったーー。

第一幕　～召喚された少女～（後書き）

ついに美冬が召喚されました。五男の王子の花嫁に抜擢です。

第二幕　～風のごとき少女～

相沢美冬（あいざわみふゆ）は今、魔法大国にいる。
この国の名前は、フランジェールというらしい。
自分は、この国の？花嫁？として召喚されたのだ。
五男の王子・カインによって。
それ以上は、美冬にはわからなかった。
ちなみに、最初美冬は、ここが魔法の国だってことも信じない、とわめいたが、王子とメイド頭の両方に魔法で服をだされたので、信じない訳にもいかなかった。
その服は、今美冬が着ている。
クリーム色のワンピースのようなドレスだった。
袖がふくらんでいて、ところどころにフリルやレースやリボンがたっぷりついている。
「ねえ、黒髪の君？　君の名前は？」
「美冬……」
名乗らないと、「僕の花嫁」や「黒髪の君」と呼ばれるので、仕方なく美冬は名乗った。
「ミフユか。良い名前だね」
美冬はにっこりと笑った。この名前は、大好きだった、育ての親がくれた、大好きな名前だった。
「どういう意味なの？」
「美しい冬っていう意味よ。ここって四季ってあるのかしら」
「シキ？　ここはいつもあたたかいよね、ミステル？」
「ええ。フユってどんなものですか、ミフユさま」
「寒くて、雪が降るわ」
「ユキって物語に出てくる白いものですよね、すごいなあ。あなたは本物を見てるんだ」

カインはとても優しかった。こんなあたしなんかに。
美冬は優しくされればされるほど、こんなあたしでいいのかしら、と思い始めていた。
カインには、もっとふさわしい人が、この国にいるのではないか、と。
いじめられ続けてきた彼女は、あたしなんか、と思う癖があったのだった。

カインたちに呼ばれていたのか、三人のメイドと医療班たちが現れた。
つけられた時は苦しくて痛かった傷は、なんの苦しみもなく消えた。
もとから、傷跡など、なかったかのように。
メイドたちは、カインが言うには、美冬付きの専用のメイドたちなのだという。
赤い髪・オレンジの髪・青い髪などそれぞれが鮮やかな髪をしていた。
「マリオンです！！　異世界の花嫁さま、仲良くしてください！！」
「オリヴィアと申しますわ、黒髪の姫様！！」
「テレーズです。ミフユさま」
赤い髪を二つの三つ編みにした少女が、マリオン。
オレンジの髪を二つのお団子にした少女がオリヴィア。
青い髪を後ろでひとつに結えた少女がテレーズだった。
テレーズが一番年上らしい。
「お食事の前にさっそく入浴しましょうか、ミフユさま」
「入浴？」
「行きましょう」
え？　と聞き返す間もなく彼女は連れ出された。

魔法大国の浴場は、たくさんの匂いであふれていた。
香水の様な匂いがそこここでする。
なめらかなクリーム色のバスタブにはすでに湯が張ってあった。
色とりどりの泡が浮いている。
「さあ、ミフユさま」
「え、ちょっと、きゃあああああっ！！」
いきなり服を脱がされ、美冬は湯の中に付けられた。
家の使用人たち（一人をのぞく）にさえ構われなかった彼女は、
そんなことをされたのは初めてで、かあっと真っ赤になっていた。
しばらくして入浴は終わった。

次は朝食の時間とのことで、次々といいにおいの料理が
運び込まれた。異世界の料理、つまり美冬がいた世界の
料理が出されたのだが、美冬は一度だって箸をつけたことが
ないものが並べられていた。
「ミフユ。どう？　君の世界のものばかりだよ」
「……」
「ミフユ！？」
ぼろぼろと彼女の目から涙があふれ出した。
悲しさと、悔しさと、嬉しさがいりまじった涙だった。
「……食べたことないの」
「え？」
「私、一度だってこんなもの食べたことないの。食べ方もわからない」
「泣かないで、ミフユ」
カインは優しく彼女を抱き寄せ、その頬にキスをおとして
彼女の涙を止めさせた。美冬はびっくりしたように
固まっていた。
カインはいろいろと食べ方を調べ、一つずつ美冬に

優しく教えてくれた。
ちなみに、出された料理は、
シチュー・ハンバーグ・魚の照り焼き・焼き立てのパンだった。
美冬は一見楽しそうに笑っていたが、それは実は演技であった。
彼女はカインに自分はふさわしくないとずっと思っていたのだ。
夜になり、三人のメイドに寝間着に着替えさせられた美冬は、
寝たふりをして油断させ、鍵のかかっていない窓から抜け出した。
ここは一階なので、怪我をする心配はない。
「さようなら、カイン……」
少女の悲しそうな声は、風にまぎれて消えていった。

第二幕　～風のごとき少女～（後書き）

カインの優しさに戸惑う美冬が逃げ出してしまうお話です。次回も見てください。

第三幕　～捕獲される少女～

相沢美冬（あいざわみふゆ）は、走っていた。
黒い髪を振り乱し、黒い目を潤ませて。
彼女は魔法大国フランジェールの、第五王子カインに？花嫁？として召喚されたのだが、
彼には自分よりふさわしい人がいると判断し、夜中に城を抜け出してきたのだった。
彼が好きなのかはわからない。
でも、彼は幸せになるべきだと思った。
私なんかじゃなく、本当に選ばれた、
彼が好きになった女の子と、幸せに。
「きゃっ！！」
美冬は木の根に足を取られ、その場に転んだ。
きれいだった寝間着に、土の汚れがつく。
「どうやったら、私は帰れるのかしら。私が帰ったら、彼だってあきらめて他の女の子と結婚するわ、きっと。私じゃ、彼を幸せにすることなんて、できないんだから」
ふうっ、とため息を一つつくと、彼女はまた歩き出した。
とー。
「ん！？　う～！！」
いきなり後ろから口を布でふさがれた。
目だけで後ろを向くと、そこには柄の悪そうな男がいた。仲間らしきやつが、もう一人、いる。
「アニキ！！　こいつ？花嫁？じゃないですか！？
髪も目も真っ黒だ。異世界人ですぜ」
口をふさいでいる男が、もう一人に言った。

どうやら、？花嫁？のことを知っているのは大勢いるらしい。
もう一人の男はニヤリ、と笑った。
「それはかなり高く売れるな。それに、上玉だしな」
（離して！！　離してよ！！）
美冬はじたばたと暴れたが、力でかなうわけはなかった。
大人しくしてろ、ともう一人に手刀を叩きこまれる。
美冬はそのまま気を失った。
が、男たちは知らなかった。その様子を、小さな妖精が
見ていたことに。

第五王子カインは、つねとは違う目覚めを迎えた。
「お兄様あああああっ！！」
「ぐえええええっ！！」
第五王女であり、実の妹の、フィレンカがいきなり
上に飛び乗ってきたのだ。思わずつぶれた蛙（グエル）の
様な声が飛び出す。
「お兄様大変なのおきてっ！！」
「わかった！！　起きたからどいて、フィレンカ！！」
フィレンカはひょいっ、とベッドから飛び降りた。
本当におてんばな子だ。カインは少しせき込んだ。
「お姉さまが大変なのよっ！！」
「お姉さまってミフユ？」
「そうよっ！！　妖精（ニンフ）たちが教えてくれたの。
お姉さまが、人身売買（ヒューマニア）の人達に連れてかれたって！！」
「何だって！？　ミフユが！？」
カインはベッドからすぐに降りた。バンッ、といきおいよく扉が開
かれる。
メイド頭のミステルが、血相を変えて飛び込んできた。

「カイン様、大変ですっ！！　ミフユ様がいませんっ！！」
続いて、彼女づきの三人のメイドも入ってくる。
どちらも慌てている様子だった。
「「「ミフユ様がお部屋にいないんですっ！！」」」
テレーズ・マリオン・オリヴィアが慌てたように叫んだ。
カインは部屋を飛び出し、彼女の部屋に飛び込んだ。
ミステルたちの言っていることが間違いだとは思わない。
ただ、自分の目で確かめたかった。

ミフユはやっぱりいない。カインはため息をつき、へたり込んだ。
「どうして、ミフユ！？　どうしていなくなったの！？」
彼女の部屋は、誰かがいた形跡などないかのように片づけられていた。
天蓋つきのベッドの布団は、きっちりと折りたたまれている。
銀のティーセットは、ピカピカに洗いあげてあった。
ただ、風呂の匂いの残り香だけが、少女がいたことを現していた。
「お兄様っ！！　悩んでないで早くお姉さまを探しにいきましょうよっ」
声をかけるのをためらうメイドたちに変わり、フィレンカが怒鳴るように
言った。ぎらぎらと炎のように目がきらめいている。
「わかった！！　僕は今すぐに人身売買（ヒューマニア）がいる場所を
特定する！！　フィレンカは妖精（ニンフ）たちに目撃情報を確認してっ」
「りょうかいよ、お兄様っ！！」
フィレンカとカインは、一斉に窓から飛び出した。

その頃、美冬は。

倉庫のような場所で目を覚ましていた。着ていた服は脱がされ、革製の
丈夫そうな服を着せられている。高そうな服だったから、持って行かれた
のかもしれなかった。
「ここは・・・・・・・」
「・・・・・・・」
美冬が声を上げると、ビクッ、と銀色にきらめく髪をした
少年が反応した。ふわふわとしてそうな耳がピンッ、と立っている。
狼男（ウェアウルフ）の少年だった。彼は大きな獣の目で彼女を見た。
「あんたも、売られたのかい？　人間みたいだけど」
「私、異世界から来たの」
「？花嫁？か。なんで逃げてきたの？　城ではよくされてたんだろ？
おいらたちと違ってさ」
「あそこにいても、私、王子を幸せにできないから」
「なんで？」
「なんでって・・・・・・・」
美冬は困り果てた。彼の目はどこまでも純粋で、言葉に迷った。
「なんで幸せにできないって思うの？　そんなの王子が決めるべきことだろ？　あんたが決めるべきじゃないんじゃないの？」
ギョッとしたように少年が黙った。おろおろとして、服を探り始める。
どうしたんだろう。そう思った美冬は、頬を濡らすものを見て自身も驚いた。いつのまにか、泣いていたのだ。
「これ、使えよ」
少年はティッシュを差し出して来て、美冬は黙ってそれを受け取った。
慌てて目をこする。心配そうに、少年は彼女を見上げていた。
「ごめん・・・・・・」
「いいのよ。本当のことだから。私、バカだったわ。ちゃんと、王

子と
相談すればよかったのよね」
「ねえ、あんた名前は？　オレはルー！！」
「美冬よ。よろしくね」
「ミフユ？　言いにくいな、ミーって呼んでいいかい？」
「ええ。いいわよ」
美冬たちが笑い合っている最中に、扉が開けられる音と、
少女の泣き声が聞こえた。
下っぱらしき男が、鳥の羽根が生えた少女を放り込むと、
また鍵を閉めて去って行ってしまった。
泣きじゃくる少女に、ルーと美冬は困ったようにしていたのだった。

第三幕　～捕獲される少女～（後書き）

美冬がさらわれてしまい、そこで出会った少年たちと仲良くなります。王子様も助けに向かいますよ。
次回もよろしくお願いします。

第四幕　～脱出する少女～

「出して！！　ここから出して！！」
わあわあと泣きわめく少女に、ルーがここからは出れないよ、と諦めたように言った。
その目はとても悲しかった。
本当は、彼も帰りたいのだろう。
美冬は悲しかった。こんな小さな子が、すべてをあきらめたような目をしているのだ。
「や～だ～！！　おうち帰るうううっ！！」
じたばたと手（羽根？）足を振りまわす少女。
勢いよく顔に命中し、ルーは涙目になって少し下がった。
「オレだって、本当は帰りたい……帰りたいよう……うわあああああんっ！！」
「わあああああああんっ！！」
泣き声が二重奏で響き渡り、美冬は自身も泣きたくなった。
堅そうな棍棒で、見張りの男が壁を叩いて怒鳴る。
「泣いてんじゃねえよ、ぶっころすぞ！！」
「「わあああああああんっ」」
声がさらに大きくなった。もう騒音公害になりえそうなほど、かなり大きい声だ。男は耳をふさいで美冬を睨みつけた。
「おい、そこのお前！！　黙らせろ！！」
「無理よ、そう思うんだったら、二人をここから出して。私が残るから、二人を帰してあげてよ」
ぴたり、とルーと少女が泣きやんだ。両側から美冬の腕を掴み、引き止めるかのように叫ぶ。
「だ、駄目だよ、ミーを置いて帰れない！！」
「お姉ちゃん、もう泣かないから、ぎせいにならないで！！」
また壁が叩かれた。三人が身をすくめて黙りこむ。

「出せる訳がねえだろ！！　鳥少女（セイレーン）と、人狼（ルー・ガルー）は価値が高いんだ。黒髪の異界人よりは低いが、な」
「オレは狼男（ウェアウルフ）だ！！　間違えんなっ！！」
ルーが唸り声を発した。だが、かわいらしいだけで、全然怖くはない。男は笑いながら、一度部屋を出て行った。

「私、役に立てなかったわね、出してあげられなくて、ごめんなさい……」
ため息をつきながら美冬は謝った。悲しそうな顔で、二人も謝る。
「俺も、自分のことしか考えなくて、ごめん」
「あたしも……」
「私たち、全員が同じだったのね、だったら、お互いを許しあいましょうね、いい？」
「「うんっ！！」」
二人の笑顔が太陽のように輝いた。
その笑顔を見て、美冬はとてもうれしくなった。
美冬の村では、こうな風に笑う子は、一人もいなかったのだ。
「ところで、あなた、名前は？」
「あたし、シーレーン！！　お姉ちゃんは？」
「美冬よ」
「よろしくね、ミフユお姉ちゃん！！」
こうして三人はさらに仲が良くなったのだった。

十分後、さっきの見張りが戻ってきた。
手には、ひらべったい堅そうなパンのようなものと、ドロリとにごった黒い液体、フルーツらしきもの

が載せられた、木のお盆を持っている。
「食え」
一旦鍵を開けると、男はそれを中に差し入れた。
お腹がすいていたらしく、ぱっ、とそれを奪うように取り出すルー。パンにフルーツを巻くと、液体をかけ、がつがつと食べ始めた。
幾分ゆっくりと、彼と同じようにシーレーンも食べ始める。美冬もまねをして食べてみた。
「あ、おいしい……」
パンは見た目に反し、とても柔らかかった。ふわり、ととけてしまいそうだ。フルーツに見えたものは、やっぱりフルーツだった。バナナのような、オレンジのような、変わった味がする。液体は甘く、育ての親が言っていた、チョコレートと、特徴が似ていた。
「私、これ、だいすきなの！！　ルーは！？」
「うんっ、オレも好きだよ」
瞬時にシーレーンが笑顔になり、ルーが口の周りを、甘くて黒い液体でベタベタにしながら笑い返した。たまたま持っていたちりがみで、美冬は彼の口元をぬぐう。
「これ、なんて言う名前なの？」
「？ショコルーン？だよ。庶民料理さ。でも、これがうまいんだよなあ」
「うん、とってもおいしいの！！」
シーレーンは喜びのあまり空中に飛び上がった。きれいな鈴のような声が口からこぼれる。
「わあっ、こんなところで歌うなっ！！ミー、耳ふさいでっ！！」
「え、どうして！？」

「いいからっ！！」
鳥少女（セイレーン）の歌は、人を魅了し、惑わす。
まだ幼いとはいえ、その力ははかりしれない。
美冬は言われるままに耳を両手でふさいだ。
シーレーンの歌はまだ続き、音を立てて見張りの男が立ち上がった。その顔には、恍惚（こうこつ）とした
ような色があった。歌に魅了されたらしい。
「やった！！　シー、そのまま歌ってろ！！」
片手だけ一時離すと、ルーはかなり近づいていた男から、檻の鍵を奪い取った。
美冬が鍵穴にそれを差し込み、檻が開く。
「よしっ！！　逃げるぞ、シー！！　シーってば！！」
シーレーンはすっかり興が乗ってきたらしく、歌い続けていた。仕方ないので、ルーが小脇に抱えて走り出す。楽しそうに歌う声は、逃げている最中、かなりの人数を魅了させたのだった。

第四幕　～脱出する少女～（後書き）

久々の投稿です。美冬の状況が少し変わりましたよ。
徐々にやっていくので、次回も見てください。

第五幕　～戦う少女～

相沢美冬（あいざわみふゆ）は走っていた。
隣には、鳥少女（セイレーン）の女の子を背に負った、
狼男（ウェアウルフ）の少年・ルーが走っている。
「ルー！！　大丈夫、重かったら変わるわよ？」
「大丈夫だよ、ミー！！　……てゆーか、軽すぎて
逆に心配なんだよな、こいつ」
　こいつ、と言われたシーレーンは、すやすやとかわいらしい
寝息を立てていた。さっきまで起きていたのだが、
空を闇が覆っているせいか、歌い疲れたのか、眠ってしまったのだ。
両方かもしれないが。
「見つけたぞ！！」
　前の通路から二人の男が飛び出してきた。もう、三人が逃げたこ
とが
伝わってしまっているらしい。
「観念しな。もう逃げられやしねえよ」
「通してもらうわ」
　近くに落ちていた武器を構えると、美冬は男に向かっていった。
それはハルバードと呼ばれる、斧にに似たぶきだった。
突くことも斬ることもできる。
　ビギナーズラックで一度はあたったが、二回目にはじかれ、武器を
取り上げられてしまった。驚いて動けなくなる彼女に、
男の拳が迫る！！
「危ない、ミー！！」
　勢いよくルーが男にぶつかり、その矛先を変えた。
男の拳は空を切る。そのせいで、ルーは殴られ、窓に叩きつけられ
た。
「いてて……」

「ルー、大丈夫！？」
「俺は大丈夫……ああっ、シー！！」
彼はシーレーンを背負ったままだった。慌てて立ち上がる。
けれど、彼女はぶつかられた際に起きたらしく、
翼を広げて空中に浮かんでいた。
「ふえ、何があったの？」
「……よかった……つぶしちゃったかと思ったぜ」
ホッとしたルーは、暗幕を掴んで立ち上がろうとした。
が、思ったより力が籠ってしまい、ビリッ、それが敗れ、
彼は再びその場に転がる。ひっくり返った彼の目に
映ったのは、金色（こんじき）にきらめく月だった。
今日は満月なのだ。
ルーの血が騒いだ。ざわざわと毛皮が逆立つ。
体が震えだし、徐々に変化していった。
細い体を毛皮が覆っていく。
牙が鋭くなり、爪が長く伸びる。
「オオオオオオ！！」
完全に狼の姿となったルーは、おたけびを上げて
男たちに飛びかかった。次々と男たちが倒れる。
鋭いナイフのような爪が、男たちを襲い、引き裂こうとした。
「駄目ええええっ！！」
叫んだのは、シーレーンだった。
翼をはばたかせ、ルーの方に向かう。
美冬が止めようとしたが、その手は空を掴んだ。
ルーの爪は、シーレーンの翼を切り裂いた。
真っ赤な花のような鮮血が散り、彼女が落下する。
「シーレーン、しっかりして！！」
美冬は服の袖を破り、彼女の翼に巻きつけて止血を始めた。
うぅ、と痛々しいうめき声が少女の口からもれる。
「オオオオオオ！！」

ルーがまたおたけびを上げた。否、それは泣き声だった。
彼は目からボロボロと涙をこぼして泣いていた。
後悔をしているかのように、壁を叩き始めた。
「ルー、落ち着くのよ、シーレーンは大丈夫！！
正気に帰りなさい、ルー！！」
「この、化け物が！！」
男の一人が立ち上がり、飛び道具を構えてルーを狙っていた。
それは、寸分の狂いもなく彼をマークしていた。
「やめて！！」
美冬が男に掴みかかり、男の武器の照準がずれる。
暴発し、ズドン、と大きな発砲音が壁を震わせた。
巨大な狼の腹に、小さな銀の玉が食い込んだ。
「ガアアアアア！！」
「ルーーーーーーー！！」
血の雫をしたたらせながら倒れる狼を、
美冬は服が汚れるのにも構わず抱きとめた。
もう一方の袖もちぎり、傷におしあてる。
だが、血はなかなか止まらず、袖が一面血で染まっただけだった。
「助けて！！　誰か、ルーを助けて！！」
美冬はせきを切ったように泣きながら、大声で助けを求めた。
月が黒い雲にかげり、ルーの体が少年のものへと戻っていく。
「ごめん……シー、ミー……オレ、先に、行くから……」
途切れ途切れに言いながら、ルーは血を吐いた。
何度かせき込み、そのたびに血を吐く。
「ルー、もうしゃべらないで！！　死んじゃいやよ！！」
「やだよ、しんじゃやだあああああっ！！」
ことの次第がわかったらしく、シーレーンも、
血を撒き散らしながらバタバタを暴れ始めた。
と、その時だった。
「何で泣いてるの？」

聞こえてきた声に、美冬はぴたりと泣きやんだ。
それは、第五王子、カインの声だった。
「王子！！」
「誰が君を泣かせたの？」
「違うの！！　王子助けて！！　けがしてる子がいるの！！　死んじゃうかもしれないのよ！！」
「待っていて、すぐ助ける」
壁がまたたく間に消え、泣きそうな美冬の目と、心配そうなカインの目がかち合った。

第五幕　～戦う少女～（後書き）

美冬逃亡編が、もう少しで終わります。
幸せに向けて、動き出しますので、
次回も見てください。

第六幕　～救出される少女～

相沢美冬（あいざわみふゆ）は、いきなり壊された壁に
ぼうぜんとしていた。目には涙をためたまま、第五王子、
カインを見ている。カインの方は、すぐさまそこに足
を踏み入れ、彼女に抱きしめられた狼男（ウェアウルフ）の
少年と、泣きわめく鳥少女（セイレーン）の少女を見ていた。
「女神の慈悲によりて、彼の者たちを癒せ……モント！！」
　銀色の光が周囲にあふれていく。
みるみるうちに、彼らの傷はあとかたもなく消えていった。
　コロン、と少年の体内にあったハズの銀塊が、その場に
転がって行った。
「ルー！！　シーレーン！！　大丈夫！？」
「う……オレ、どうなったんだ……？」
「いたくない！！　いたくないよ！！」
　ルーは自分に何が起こったかわからない様子だったが、
シーレーンは治った翼でピョンピョンと跳ねまわった。
「ありがとう、カイン。二人を助けてくれて……」
「どういたしまして。……よかったよ、君が無事で」
　にこりと笑われ、美冬の顔に朱が差していった。
カインが美冬の手を取り、彼女を助け起こす。
二人の距離がしだいに近づいていき、ルーが慌ててシーレーンの
目を手でふさいだ。彼女が暴れ、ルーごと空中に浮かびあがる。
　と、その時。
「お姉さま、お兄様、ご無事ですの！？」
　第五王女、フィレンカが部屋に飛び込んできたので、
二人は慌てて離れた。ルーが驚いて手を離してしまい、
落下して頭を強く打ちつけて涙目になる。
「ご無事のようですね、姫様方」

フィレンカの肩に乗っていた、小さな妖精（ニンフ）の少女が
にっこりと笑った。美冬のことを報告した妖精（ニンフ）だった。
「この子が、お姉さまがさらわれた、ってほうこくしてくれたんだよ！！」
「そうなの？　ありがとう」
「礼にはおよびませんわ、未来の花嫁。……自己紹介がまだでしたわね、
フィーナと申しますわ。以後おみしりおきを」
「よろしくお願いします」

美冬はこうして王子に助けられ、離宮へと戻った。
カインとフィレンカは、公務や勉強で缶詰にされたので、今美冬は与えられた部屋で一人だった。
否、フィレンカの友達だという妖精（ニンフ）、
フィーナがちょこん、と小さめのクッションに腰かけて、ミニチュアなティーセットでお茶を飲んでいた。王女が代理として来させたらしい。
「未来の花嫁、ご気分はいかがですか？」
「あの、美冬って呼んでもらっていい？」
「わかりました、ミフユさま」
美冬は銀のティーポットから、カップにお茶を注いで口に運んだ。今日のお茶は、カモミールティーだった。
「「「ミフユさまっ！！」」」
と、その時だった。
美冬づきのメイド三人、マリオン・オリヴィア・テレーズが、勢いよく扉を開けて入ってきた。
ノックのことも忘れるくらい、彼女たちは慌てていた。
「ご無事でよかったです！！」
口ぐちにそう言う彼女たちは、目に涙を浮かべていた。

美冬はいたたまれなくなり、三人に謝罪した。
「心配をかけてごめんなさい……。これからはしないわ」
「それから、その服汚れてらっしゃいますので、お召替えをお願いいたしますわ、入浴の準備もできています」
美冬は、この前のことを思い出して赤面した。
三人がかりで脱がされ、そのままお風呂に入らされたのだ。
「あの、今日は一人で入りたいんだけど、いいかしら？」
「よろしいのではないでしょうか？」
「「マリオン！！」」
一番年下らしきマリオンが、二つの三つ編みを揺らしながら言うと、他の二人の非難の声が上がった。
「この年の方だと、他の誰かに肌を見られるのを恥ずかしがる傾向にありますわ、テレーズ様、オリヴィア殿」
以外に大人びた口調だった。この前はしゃいでいたようだったのは、
多少無理をしていたのかもしれない。
二人が引き下がったので、美冬は一人でお風呂に入れることになった。
何かあったら、という用心のために、三人のメイドが外で見張る。
美冬は昨日とは違う浴場に通された。かなり広く、お風呂がいくつも
ある。そこは大浴場だった。
美冬ははしゃぎ、泡風呂やら、花風呂やら、牛乳風呂にいたるまで入りつくし、上がるころにはすっかり頬が紅潮（こうちょう）していた。
黄色いリボンやフリルのついたドレスに着替えさせられ、再びフィーナ
と二人きりになった。他の仕事もあるとかで、三人とは別れたのだ。
美冬たちが、出されたビスケットやスコーンに手を伸ばそうとした、
その時だった。

「ミフユさまっ！！」
入ってきたのは、メイド頭のミステルである。
抱きしめられ、温かいぬくもりを感じた彼女は、
もう何があっても逃げるのはやめようと思うのだった。
ミステル・カイン・フィレンカ・テレーズ・
オリヴィア・マリオンと、自分を心配してくれる
人たちがいるのだから……。

第六幕　～救出される少女～（後書き）

ついに美冬が救出されました。
これからもいいことわるいこと
たくさんありますが、だんだん
彼女には強くなっていって
もらいたいと思います。

第七幕　～告白される少女～

相沢美冬（あいざわみふゆ）は、スミレの香りで目覚めた。
ベッドのシーツにしみ込ませる香料は、日によって違うらしい。
「おはようございます、ミフユさま」
にっこりと笑ってあいさつしたのは、オリヴィアだった。
「おはよう、オリヴィア。テレーズとマリオンは
今日はいないのね」
「はい、お客様がいらしているようなので、接客要員
として行ってしまったのですわ」
オリヴィアははきはきした声で美冬に事情を話した。
話しながらも作業をしていて、朝の紅茶が乗ったトレイ
をティーテーブルに並べている。
今日のお茶は甘いミルクティー。お茶受けは、
ごまのような粒がたくさんちりばめられた、クッキー
にもビスケットにも見えるお菓子だった。
フランジェールのお菓子らしい。
「？クリルア？です。とても甘いですよ。
星の粒がかかっています」
「星の粒！？　星って食べられるの！？」
「あ、ごめんなさい。星の粒っていうのは、
ミフユさまの世界で言えば、サトウですわ」
美冬はお菓子を一つ取ると、かじってみた。
ふわり、サクサク、カリカリ……。
本当にふしぎなお菓子だった。中はふんわり
外はカリカリ、感触はサクサク。
今まで食べた何よりも、甘かった。
「おいしい……」
「それはよかったです」

もうひとつ、もうふたつ、もうみっつ、と
あまりのおいしさに、美冬はお菓子の皿を
すべてカラにしてしまった。
しまった、と思ったが、気に入っていただけて
嬉しいです、とオリヴィアが笑っているので、
美冬はホッとした。怒られるかもしれないと
思ったのだ。美冬は、なかなかあの世界での
癖が抜けなかった。
と、その時。
扉がふっとんだ。文字通りふっとばされ、
壁にガツン、とぶつかったのだ。
美冬は目を大きく見開き、オリヴィアは
呆れたように肩をすくめた。
「フィレンカ姫、おてんばもほどほどに
なさいませ。ミフユさまが驚いておられますわ」
てへっ、と壁をふっとばした犯人である
おてんば姫は、舌を出しておどけてみせた。
「ごめんなさい、お姉さま。つい扉を壊しちゃった。
でもね、あたし、早くお姉さまとお話したかったの」
「お姉さま？」
「あなたお兄様と結婚するんでしょう？　だったら
お姉さまじゃないの！！」
親しそうな笑顔を向けられ、美冬は戸惑った。
この子の顔には、少しも邪気はない。
本気で自分と仲良くしたいと思っているようだった。
「カインお兄様はね、とってもやさしくてカッコイイの！！
きっと、お姉さまもすぐ好きになるわ！！
女の人で、お兄様が嫌いっていう人私知らないもの！！」
きゃらきゃらと笑いながら、フィレンカはオリヴィア
が入れてくれたミルクティーを飲み始めた。

かなり？星の粒？をカップに放り込んでいる。
甘すぎないかしら、と美冬は思った。
ペラペラとしゃべりまくる姫に、美冬が弱冠
引いていたその時、また来客が襲来した。
「ミフユお姉ちゃん、久しぶり～」
「ミー！！　これからこの城で俺達働くことに
なったんだ！！」
鳥少女（セイレーン）のシーレーンと、
狼男（ウェアウルフ）のルーがそこにはいた。
「シーレーン！！　ルー！！　会いたかったわ！！」
「あたしも会いたかったよ！！」
「でも、二人とも家に戻ったんじゃなかったの？」
「一度戻ったけど、ミーには世話になってるし、
恩を返したいと思ってここに来たんだ！！」
四人はすっかり意気投合し、美冬は少しためらいながらも
普通に話すことができるようになっていた。
次々とお菓子とお茶が運び込まれる。
お菓子とお茶があらかたなくなった時、
王子づきのメイドだというナナが、美冬を訪ねてきた。
「我が主がおよびです、ミフユさま」
「王子が、私を呼んでいるの？」
「はい」
美冬はナナに案内され、カインがいる場所へとやってきた。
そこは、色とりどりの花が咲いた裏庭だった。
「では、私はこれで」
ナナは帰ってしまい、二人きりになる。
「ミフユ、手、出して」
「え？」
「いいから！！」
おずおずと美冬が手を差し出す。

カインは笑顔でその手を取り、美冬の体が宙に浮いた。
空中にそのまま制止する。
カインの魔法の力だった。
「すごーい、私、空に浮いてる！！
こんなの初めてだわ！！」
「気に入ってもらえてうれしいよ」
カインはにっこりと笑った。
美冬も笑い返す。が、次の瞬間
彼の顔が厳しいものになった。
「ミフユ。もう二度とあんなことしないでね。
君が死んだら、ボクもフィレンカも、
みんな悲しむからね！！」
「ごめんなさい……」
「なんで、君は逃げたの？」
美冬は深呼吸をしてから、顔を上げた。
もう逃げない。そう決めた。
「私じゃ、あなたを幸せにできないって
思ったの。私より、あなたにはふさわしい
人がいるって」
「そんなことない。ボクは君が好きなんだ！！」
カインは美冬の体を強く抱きしめた。
彼女の顔が赤く色づく。
「ボクのことが嫌いでもいい！！　この世界が
好きじゃなくていい！！　元の世界で幸せに
なれないなら、ずっとここにいてよ！！」
「カイン……」
美冬の目から真珠のような涙がこぼれる。
彼と長い長いキスをかわしながら、
彼女はもう二度と何があってもいなくなったりはしない、
と心に誓った。

「なによ、あの女、あんなに王子にくっついて……！！」
一人の少女が、憎々しげに彼女を見ていることに、
二人は気づいていなかった。

第七幕　～告白される少女～（後書き）

美冬とカインが結ばれます。
ですが、そう簡単には
幸せになりませんよ。
彼女には、まだまだ
試練が残っているので。

第八幕　～文字を学ぶ少女～

相沢美冬(あいざわみふゆ)は今、自室で勉強をしていた。
テレーズを教師(せんせい)にして、この世界の文字
の勉強中である。美冬には、そういう魔法がかかっているので、
日常会話などで困ることはない。
だが、文字は違った。文字を読むことも、
書くことも、美冬にはできない。
美冬はカインを、カインの思いを受け入れた。
身分は、自動的に第五王子の花嫁、ということになる。
なので、いろいろと勉強することがあった。
「いいですか、ミフユさま。
？私はミフユです？は、？シスネアスミフユレンカ？ですわ」
「し、しす、しす、シスネ……？」
異世界の発音に苦心しながら、美冬は口を開いた。
初日なので、まだあまり上手くいかない。
テレーズはニコニコとしながら、本を閉じた。
美冬は申し訳なくなって落ち込む。
「少し、休憩しましょうか」
はい、と返事をした彼女は、チョコレート色
のシンプルなドレスのすそを握っていた。
テレーズが何か言おうとした、その時。
ドオオオオン！！
轟音と共に、扉が吹っ飛んだ。
「フィレンカ様！！　またですか！！」
眉をつりあげてテレーズが怒鳴る。
がーー。
「ご、ごめん……なさい……」
「カイン様！？」

そこにいたのは、なんとカインだった。
壊れかけていた扉の留め金を直そうとして、
間違って破壊の呪文を使ってしまったらしい。
「カイン！！」
美冬は彼に駆け寄った。失敗を見られたのが
気恥ずかしいのか、カインは頭をかいて
困ったような顔になっている。
「ごめんね、ミフユ。今直すから」
修復の魔術の光がその場を照らす。
すぐに、扉はもとの状態に戻っていた。
とーー。
「なげかわしい」
きつい目つきをした若い男が、
その場に現れた。
その魔術が、瞬間移動だと美冬が
知ったのは、かなり後のことだった。
「ライカ教官……」
訳が分からない美冬に、こっそりと
テレーズが、カインの魔術の教師だと
教えてくれた。剣術も教えているらしい。
「最近、失敗が多すぎるぞ」
「すみません……」
ギロリとライカと呼ばれた男は、
美冬に目をやった。
いつも、村人から向けられていた視線。
美冬は驚き、じりじりと後ろに下がった。
「この娘が来てからだな、この疫病神が！」
「やくびょう……がみ……」
？何の役にも立たない美冬！！　あんたなんか、
村の御厄介でしかないのよ！！？

?疫病神……?
?疫病神！！　死んじゃえ！！?
　美冬の頭に、拒絶され、愛されなかった
過去がよみがえった。村の子供たちのあざけりが、
鮮烈に頭に響く。まるで、経った今、言葉を
ぶつけられたかのように。
　美冬はその場にへたり込み、頭で響く声
をかき消すかのように耳をふさいだ。
　だが、実際に聞こえているわけではないので、
それをかき消すことはできない。
「無礼者っ！！　ミフユさまになんということを！！」
「ライカ！！　ミフユは関係ない！！　失敗したのは、
ボク個人の不徳だ！！」
　テレーズは今にも殴りかからんばかりに怒鳴りつけ、
カインも刺すような視線を彼にぶつけた。
　けれども、彼は冷たく笑うだけだった。
「だいたい、私は、異界の娘を召喚するなど、
最初から反対だった。こんなどこの馬の骨とも
わからぬ娘の、どこがいいというのですか？」
「ミフユはやさしい娘だ！！　あんたなんかに、
侮辱されていい娘じゃない」
　かつてない怒りが、カインの中で揺らめいていた。
　許せない。ミフユを馬鹿にするなんて。
　自分なら、何を言われても許せた。
　だが、彼女に何かしたり、彼女を
馬鹿にするのは許せない。
　絶対に、許さない！！
　心の闇に、反応した紅き焔（ほむら）。
　テレーズが悲鳴を上げなければ、
カインは新たにわき出した力で、

ライカを焼き尽くすところだった。

ライカは逃げ出し、テレーズも次の仕事
に行ったので、カインは美冬とふたりきりになった。
美冬はまだなげいていて、耳をふさいだまま
悲痛な小さな声を心中で呟いている。
（やめてやめてやめて……やめてっ！！）
震える小さな体を、カインはやさしく抱きしめた。
一瞬、彼女の体がこわばる。
でも、彼女は抵抗しなかった。
「ミフユ、ごめんね、つらい思いさせて。
でも、君を傷つけるものは、もういないよ」
泣かないで。悲しまないで。
自身も泣きそうになりながら、カインは美冬に語りかけた。
美冬が自ら手を伸ばし、カインの背中に手を回す。
「カイン……」
「ミフユ……」
「私、怖いの。拒絶されるのが、怖い……。
だって、私は、向こうの世界では、
拒絶ばかりされて来たの」
「誰だって怖いよ」
彼女の黒い目に浮かんだ涙をぬぐいながら、
カインはまっすぐに彼女を見つめる。
「ボクだって、拒絶され続けて来たら、
そう思うと思うよ。でも、誰が拒絶しても、
君には、ちゃんと受け入れている人がいるから。
ボクも、テレーズたちもミステルも、フィレンカ
たちもいるから！！　だから大丈夫だよ」
カインは美冬の額にキスの雨を降らせた。

美冬は真っ赤になったが、そのままでいる。
もう、頭の中に声は鳴り響いてこなかったーー。

第八幕　～文字を学ぶ少女～（後書き）

美冬が勉強をします。
美冬が、異世界から来た
というのに苦もなく会話
している訳が、ここで
明かされますよ。

第九幕　～非難される少女～

相沢美冬(あいざわみふゆ)は今日も勉強をしていた。
今日の教師(せんせい)は、ミステルだ。
「いいですか、ミフユさま。まずは、ご挨拶から教えましょう。テレーズのやり方では、覚えにくいのでね」
「は、はい……」
「まずはおはようございます……これは、？フィン・レン？です。フィンはおはようだけで、レンがございますですわ」
早速美冬はやってみた。
桜の花のような唇を動かし、必死で言おうとする。
発音は難しかったが、なんとか言うことができた。
「ふぃん・れん……」
「なかなかですわ、ミフユさま。後、わたくしたちに接する時は、？フィン？だけで結構ですわ。では、おっしゃってみてください」
「ふぃん、ミステル……。これでいいんですか？」
「バッチリですわ」
母親のような笑顔を浮かべるミステルに、美冬は嬉しくなった。
少しずつでも、自分は変わっていっている。もう、前の自分ではない。

ここに来てから、美冬は幸せだった。
「お姉さま、遊ぼう！！」
「ミフユお姉ちゃん、あたしも遊びたい！！」
「ちょっとお前ら待てって！！　いてて……」
と、いきなり窓から、第五王女フィレンカ、
下働きをしている鳥少女（セイレーン）のシーレーン、
同じく下働き狼男（ウェアウルフ）のルーがやってきた。
ルーは止めようとしたらしかったが、窓枠に頭
をぶつけて呻いている。
「何をやっておられるんですか、姫様！！
下働きの者たちまで巻き込んで！」
「まきこんでないもん！！」
ぷうっ、とフィレンカは頬をふくらませていた。
ルーは巻き込んでるだろ、と叫び、フィレンカ
に睨みつけられている。
三人はかなり仲がいいようだった。
ルーも苦笑はしているけれど、
それは嫌ではないらしい。
「フィーは考えなしすぎなんだよ！
今はミフユは勉強中だろ！！」
「うるさいな、ルー！！
勉強も大事かもしれないけど、
交流を深めるのだって立派は勉強でしょっ！！」
「口にへらないやつ……」
「なんですって！！」
言い合う二人の様子に、ミステルは驚いた
ような顔をしていた。
それから、くすり、と笑う。
その顔は、まるで母親のようだった。
「姫様が、あんなに楽しそうに。あの子たち

を城に呼んだのは、結果的によかったわね」
　美冬は首をかしげた。あんなに元気そうな
感じだったけれど、いつもは違うのだろうか。
「どうせ、もう勉強にはならないわね……
ミフユさま、どうぞ姫様たちと遊んでください」
「え、いいの！？」
　太陽のようにフィレンカの笑顔が輝く。
シーレーンも同様だ。
　しかし、ルーだけはすまなそうに謝った。
「すみません……」
　ミステルはさらに大きな声を立てて
笑い、暗に怒っていないことを示した。
「その前に、お茶にしましょうか」
　チリリン、とテーブルに置かれた鈴
を鳴らし、ミステルは言った。
　この銀色の美しい鈴は、
メイドや下働きのものを呼ぶ時に
使用されるものである。
　しばらくして、若い少女が
やってきた。ミフユが会ったことのない
メイドである。気位の高そうな雰囲気だった。
「およびですか」
　髪を風変わりな形に結いあげたメイドは、
髪や腕や足にまでごてごてと装飾品を
飾っていて、およそ仕事をする気など
ないような感じだった
　お仕着せにも、レースやフリルやリボン
を勝手に縫いつけ、スカートは三段になっている。
　ミステルは眉をしかめたが、
すぐに表情を引き締めて口を開いた。

「お茶をお願いするわ」
「それは私の仕事ではありません」
今度は少女の眉がしかめられた。
それが実際の仕事ではなくても、
やるのがメイドである。
だが、貴族出の者の中には、
高慢で決められた仕事以外は
やらない者もいた。
はあ、とミステルのため息。
去る間際に、そのメイドは
じろりと美冬を睨んで去って行った。
拒絶するような、言葉にしなくても
憎しむが伝わるような、そんな目、だった。
「私が入れてきます」
仕方なく、ミステルが席を外し、
お茶を入れて戻ってきた。
今日のお茶は、コルネルの花の
香りがするお茶だった。
美冬の世界のバラに良く似ている。
美冬のお気に入りのお菓子、？クルリア？
と、ふわふわに焼きあげたチョコレートの
ケーキに良く似た、？ルーナエル？が出た。
どれもおいしく、美冬が一口食べるだけ
で大好きになったものだ。

こうしてお茶は楽しく終わり、
全員はかくれんぼをして遊ぶ
ことになった。フィレンカが
提案し、シーレーンが
私もやりたい、と言ったのだ。

ルーだけはそんなガキみたいな
こと、とかぶつぶつ文句を言っていたが、
二人に押し切られてやることになった。
美冬は断る理由もないので、
加わっている。じゃんけん（この世界にも
それはあるらしい）で鬼を決め、
彼らは走り出した。
鬼は美冬だった。
百を数えた後、早速はりきって探し
始める。友達のいなかった美冬は、
かくれんぼをやるのは生まれた初めてだった。
「皆、どこにいるのかしら……あ、ルー！！
見つけた！！」
一番最初に見つけたのは、ルーだった。
廊下に飾られた、巨大な壺の中に隠れていたのだ。
本人は文句を言っていたわりには上手く
隠れたようだが、手が出ていたのですぐに
分かってしまった。
「ちぇっ！！　見つかっちゃった」
文句をいいつつ、ルーは出てきた。
「次は二人ね！！」
「はりきってるなあ、ミー」
「ええ！！　私、かくれんぼって
やるの初めてなのよ」
ルーに手を振り、美冬は歩き出した。
すぐにシーレーンを見つける。
ここまでは、すごく簡単だった。
シーレーンの場合、裏庭の茂みに
隠れていたのだが、ふわふわ浮いていたので、
すぐにわかってしまった。

「さあ、あとはフィレンカね！！
どこへ行ったのかしら」
だが、フィレンカはそう簡単には
見つからなかった。この二人よりは
ここのことも詳しいはずなので、
無理はない。美冬はさんざん歩き
回り、ついに前庭にたどりついた。
前庭は、色とりどりの花が咲き乱れていて、
とても素敵なところだった。
美しい湖まである。
「とっても素敵！！」
「誰！？」
思わず声を上げると、誰何の声が投げられた。
湖から、きれいな顔立ちをした人魚が出てくる。
「あんた、誰？」
「美冬っていうの。よろしくね！」
「ミフユ？　あんたが異世界の姫？」
「異世界から来たわ」
刺すような視線は、決して美冬を歓迎はしていない。
どうして嫌われてるのか、美冬にはわからなかった。
「私、あんたが大嫌い！！」
「どう……して……」
「あんたが、カインの花嫁だからよ！！
どうして異世界婚が認められているのに……
異種族婚が認められてないのよ……」
憎々しげに人魚が叫ぶ。
美冬はなんと言っていいのかわからず、
その場に立ち尽くした。
「あんた！　カインのことが好きなの！？
好きじゃないんなら、カインの周りを

うろちょろしないでよね！！」
人魚はそれだけ言うと、湖に帰ってしまう。
後に残された美冬は、茫然とするだけだったーー。

第九幕　～非難される少女～（後書き）

美冬が少しだけ異世界の言語を覚えました。
　ちなみに、この人魚は第七話の最後に出てきた声の持ち主です。

第十幕　～思い悩む少女～

相沢美冬（あいざわみふゆ）は、青ざめた顔でお花畑に座っていた。
座ったまま動かない。否、体が動かない。
「好きじゃないなら、カインのそばをうろちょろしないで！！」
そう怒鳴った少女は、つらそうだった。
自分のせいで不幸な目にあう子がいるなんて。
ここでは、美冬は求められていたけれど、傲慢だったのだろうか。
愛されて当然だと思っていたのだろうか。
あの美冬なのに。いじめられっ子の、いくじなしの、役立たずの美冬。
「私、傲慢だったよね……。カインのことを本気で好きじゃないかもしれないのに、彼の花嫁になろうとした……」
美冬の心の暗い闇が頭を上げたーー。

「お姉さま私の勝ちよ！！」
部屋に戻ろうとした時、飛び出してきたフィレンカが笑顔で言った。
美冬は、ようやくかくれんぼのことを思い出した。
「おしかったよなあ、ミー。二人は見つかったんだけど」
「次やるときは、見つけられるよ。お姉ちゃん！！」
「そう……」
ルーとフィレンカは首をかしげた。美冬の顔は、
かくれんぼに負けたからという訳ではない気がしたのだ。
あんなに張り切っていたけれど、この表情はひどく
青ざめていて、たかが遊びで負けたからといって、
こんな顔をするだろうか。
シーレーンは気づいていないらしく、

ふわふわと笑顔で空中を飛んでいた。
「ミー、どうした？　具合が悪くなったのか？」
「お姉さま、どうなさったの！？」
驚いたように二人が聞いてきたけれど、
美冬はあいまいに笑って彼らと別れた。
今は誰とも会いたくなく、一人で考えたかった。
彼女の言葉は、ただのきっかけだった。
ショックだったけど、その通りだと思えた。
わからない。彼のことを愛しているのか、
好きなのか、わからない。
彼のやさしさに甘えていたのだろうか、
と美冬は考えた。そして、気づいた。
美冬は、一度も彼に好きだと言っていない。
カインは何度も言ってくれたけど、
美冬だけが言っていない。
「カイン……」
「呼んだ？」
「きゃっ」
小さく呟いた時、当の本人が顔を出したので、
美冬は飛び上がりそうになった。
今、一番会いたくない人だった。
美冬の部屋に行こうとしていたらしく、
笑顔で歩み寄ってくる。
「ごめんね、おどかしちゃって。
ねえ、散歩しない？　いいところがあるんだ。
湖と花畑があるところ！！」
さっきの人魚がいたところだ！！
美冬は慌てて首を振った。
勢いよく振りすぎたため、首が痛くなる。
「今、具合が悪くて……」

「そう……」
カインの顔が悲しみで染まった。
しまった、と美冬は思う。
さっきまで出歩いて、部屋にいなかったのだ。
具合が悪い人間は、そんなことしない。
嘘をついて断られた、と思ったのかもしれない。
「ごめん、また、今度ね」
カインが行ってしまう。美冬は思わずひきとめそうになり、なんで引き止めるのだと、自己嫌悪した。
美冬は暗い気持ちで部屋を開けた。
そこには、ミステルがいる。
「授業の続きをしましょうか？」
「ごめん……ミステル、また今度にしない？
ちょっと疲れたの」
「あらあら、姫様たちにも困ったものね」
ミステルは疑いもせずに部屋を出て行った。
美冬はふらふらとベッドまで歩み寄り、倒れ込む。スミレの香りがただよった。
「ううっ！！　・・・・・・っく！！」
美冬は一人きりで声を殺して泣いた。

美冬はそれから、一人でいることが多くなった。カインの誘いも、フィレンカたちの誘いも、幾度となく断った。ミステルの授業も、具合が悪いからと受けなかった。
テレーズたちも、部屋にいれなかったので、食事も何もかもしないでベッドにいた。
あれから、何度考えてもわからない。

カインのことを好きなのかわからない。
半端な気持ちで彼に会いたくなくて、
美冬はかなり長い間彼に会っていなかった。
（このまま、私なんて、死んだ方がいいんだ
……。そうしたら、カインだってあの子と
結婚するかもしれない……）
鬱鬱（うううつ）としたことばかり、
最近は考えている。食事をしていないので
体は痩せほせ、水もとっていないので、
美冬は脱水症状におちいっていた。
頭がクラクラするけれど、起き上りたいとも、
食事をしたいとも思えない。水も欲しくない。
死にたい、と本気で思っていた。
すっかり明るくなっていた彼女は、
前の性格に戻っていた。世界のすべてを
呪い、いじめっ子を呪い、両親を呪った、あの時に。
消えたい。このまま消えてなくなりたい。
自分がいたって、この世界にとって益にも
なることはない。害にもならないけれど……。
もうどうでもいい、と美冬は回らない頭で
考えていた。もう、目を開けていることも
難しい。手足も動かす気になれない。
涙さえももう出ない。
とーー。
冷たい水が洪水のように美冬に
押し寄せた。おぼれそうなほどの
水に、ついせき込んでしまう。
水が口に入ったので、少しだけ意識が
はっきりしてきた。薄眼を開け、
あたりを見回す。すると、怖い顔を

した少女がそこに立っていた。
　その姿は、人間の姿をしていたけれど、
間違いなくあの時の人魚だったーー。

第十幕　～思い悩む少女～（後書き）

美冬が悩みすぎて死にかけます。
そこにやってきた、人魚の少女。
彼女の目的は！？
次回もよろしくお願いします。

第十一幕　～愛を手に入れる少女～

「バカじゃないの！？」
いきなり怒鳴られ、美冬は言い返せない。
少女が泣きながら、怒鳴りつけてきた。
「なんで、あたしの言ったこと負け惜しみだって思わないのよ！　なんで、死にそうになるまで考えてるのよ！　あんたが死んだら、私のせいみたいじゃない！！」
頭がくらくらしていた。訳がわからない。
何故彼女が怒ってるのか、意味が分からなかった。
「訳わかんないと思うけど、これだけは聞いてよね！！」
ようやく美冬の対応に気付いた少女が叫ぶ。
「カインが倒れたのよ！！」
頭が真っ白になった。カインが、倒れた！？
あんなに元気だったのに……。
「嘘……！！」
美冬は思わず呟いていた。嘘だと思いたかった。
「なんであたしがあんたなんかに、嘘つかなきゃならないのよっ！！　あんたのせいよ！！
あんたの……あたしのせいでもあるけど！！」
自分でも人魚は何を言っているのか分かっていなかった。
泣きじゃくりながら、思いついたままに叫び、怒鳴っている。
美冬は嘘ではないと知り、慌てて部屋を飛び出そうとした。
体が勝手に動いていた。くらり、となり、人魚が受け止める。
「バカじゃないの！！　何日も食べてないのに、いきなり動けるはずないでしょっ！！」
人魚の腕をかいくぐって逃げようとする美冬に、
人魚は苛立ちの声を上げた。空間転移術を使い、

リンゴのおかゆみたいなものを取り出す。
「食べなさいよ」
「早くカインに会いに行かなくちゃ！！」
「いいから食べろってのよ！！」
一喝すると、大人しく美冬は食べ始めた。命令され続けた習慣は、なかなか抜けない。味なんてしなかったけれど、美冬は必死にすすっていた。
人魚は美冬をささえたまま、いろいろなことを話した。
「カインは、あんたに嫌われたって思って寝込んじゃったのよ。……あたしじゃ、立ち直ってくれなかった」
「嫌いじゃ、ないの。でも、好きってよくわからないの」
「あたしだって分かんないわよ！！　あんなバカのどこが好きなのか、分かんない！！　」
人魚は叫びながら、昨日のことを思い出していた。

昨日、寝込んでいたカインのもとへ、彼女はやってきた。
「アクア……」
カインは前より少し痩せていた。水分をとってはいるが、最近はおかゆのようなものしか食べていないらしい。
「カイン、そんなにあの子が好きなの？」
「うん……」
照れながら言われ、アクアは眉をひそめた。
ミフユ。異世界からやってきた、カインの花嫁。
カインとの結婚を約束された、娘。
自分とは正反対の、おとなしそうで優しそうな女の子。
「ミフユのどこがいいの？」
「あの子、いろいろ苦労してるらしいんだよね。
前の世界で、いじめられてたって。
来た時も怪我しててね、守ってあげなくちゃって思ったんだ」

アクアは黙っていた。……勝てない。
あの子には、絶対に勝てない。
だけど……」
「好き……」
「え！？」
「あんたが好きだって言ったの！！」
カインは驚いたように目を見張っていた。
それは無理のないことだった。
カインとアクアは幼馴染で、友達だった。
小さい時から、あまり女性として見たことはない。
それはアクアも分かっていた。分かっていたけれど、
言っておきたかった。勝てなくても、想いだけは伝えたい。
「あたしじゃ、駄目なの？　あたしだって、カインの
ことが好きなのに！！　駄目なの！？」
「ごめん……」
「わかってたわ、あんたが私のこと女として見てないって
事わ、ね。そこで待ってなさいよ、引きずってでも、
あの子連れてくるから！！」
その後で、アクアは寝込んでいる美冬を見つけたのだった。
水分も何もとっていないで考え込んでいるのを見たら、
何故か苛立って、怒鳴りつけていた。アクアが水の力
を使えなかったら、本当に死んでいたかもしれなかっのだ。
あの子は、ミフユは、カインに好かれているのに。
カインと、結婚できるのに。

アクアは美冬を支えるようにして歩いていた。
美冬は青ざめていたが、もう逃げようとはしていない。
「ねえ、あなた、名前は？」
「アクアよ」

いきなり名前を聞かれ、アクアはつっけんどんに応えた。
それなのに、美冬は楽しそうに彼女の名前を呼んでいる。
少し明るくなったようだった。
「アクア、好きってどんな気持ちなの？」
「だから、そう簡単にわかるものじゃないんだってば！！
あんた、トロいわねっ！！　簡単にいえば、その人が
死にそうになったら困るとかそういうことよっ！！」
「じゃあ、私は、カインのことが、好き！？」
「知らないわよっ！！」
アクアはなんでこんなに苛立っているのか、気づいた。
美冬はほうっておけないタイプである。
誰かに、守ってあげなくちゃ、と思わせるような、
そんな魅力がある。小さな動物のような。
だから、それに魅かれてしまっているから、
アクアは美冬に苛立つのである。
ライバルなのに。こんな子嫌いなのに。
「ついたわよ」
ドンッとつきとばすように、アクアは彼女を中に入れた。
とたんに、カインの青ざめていた頬に血の色がさした。
倒れ掛かるように、美冬に抱きつく。
美冬は自分でも気付かないうちに、泣いていた。
温かい体を、失わないでよかったという安堵と、
カインにようやく会えたという嬉しさと、
彼を好きだと思う気持ちが、いりまじって
ぐちゃぐちゃになっていた。
この人が好き。失いたくなんか、決してない。
ようやく想いに気付いた美冬は、
泣きながらカインの背中に手を回したーー。

第十一幕　～愛を手に入れる少女～（後書き）

美冬が想いに気付きます。
友達もできましたし（本人は
認めないと思うけど）、
美冬にはどんどん幸せに
なってもらいます。
次回もみてください。

第十二幕　～旅をする少女～

相沢美冬（あいざわみふゆ）は、ミステルたちに
囲まれてだんだん元気になってきていた。
　拗ねたような顔をしつつも、アクアも
通ってきている。特に、カインは仕事の合間を
縫って毎日やってきた。彼の方も、顔色はだいぶ良く、
もう仕事をやっているのだ。
「ねえ、旅行しない？」
　そうカインに言われたのは、美冬が普通に食事を
出来るようになってから、かなり経った頃だった。
「旅行？」
　美冬はお菓子をつまみながら言った。今はお茶の時間である。
　お茶受けは、クッキーのようなビスケットのようなお菓子、
？クルリア？だった。お茶は甘い香りのする、美冬の世界の
アップルティーである。
「うん！！　ミステルが、婚約旅行に行ってきたらどうかって！！」
「えーと、それって、二人だけって……こと、かしら？」
　美冬の白い顔がみるみるうちに赤くなっていった。
　婚約して、思いが通じ合ったとはいえ、まだまだ初々しい二人だ。
　カインも同じように赤くなっていた。
「えええ、あたしも行きたい～～」
「バカ！！　婚約旅行だぞ！？　ちょっとは無い頭で
考えろよなっ」
「なんですって！！　ちびっこのくせに！！」
「誰がチビだ！！」
　頬を膨らませてフィレンカが文句を言ってくる。ルーに額を
小突かれ、口ゲンカをしていた。シーレーンは今日はお休みだ。
「そうだけど……駄目？」

「駄目じゃないわ……」
見つめ合う二人を、尋常じゃない目でアクアが見ていた。
このバカップルが！！　その目は確実にそう言っていた。
メイド三人がお茶を飲ませてなぐさめている。
まだ心の整理はついていないらしい。あきらめるのも、
好きだと気づく以上に難しいことではある。
「行きましょう、カイン」
「行こう、ミフユ！！」
こうして二人は旅費の入ったサイフと
旅券だけを持って旅行に行ったーー。

「うわあ、私、旅行って初めて！！」
美冬は馬車から身を乗り出して窓の外を見ていた。
その黒い目は、きらきらと子供のように輝いている。
美冬は旅行に行くのが初めてなのだ。
両親と一緒だった頃は、当然一緒にいかせては
くれなかった。村の外にすら行かせてもらえなかったのである。
美冬がとてもうれしそうなので、カインはさらに嬉しくなった。
そうしているうちに、最初の目的地、都市ガザールへとたどり着いた。
馬車を降りて金を払い、軽い食事をとることにする。
「ミフユ、何食べたい？」
「どうしようかしら……」
都市ガザールは露店が多かった。あたりを探していると、
誘拐されたときに食べたおいしい食べ物、？ショコルーン？が
売られている屋台があったので、それを買ってもらい、
美冬は笑顔で頬ぼった。チョレートに似た味は、やはり
最高のお味である。旅を楽しみながら、美冬はカインに
笑顔を向け、カインもまた笑顔を浮かべるのだったーー。

第十二幕　～旅をする少女～（後書き）

美冬とカインが婚約旅行に出かけます。
新キャラも登場し、また美冬たちに
試練がふりかかりますが、ぜひ
次回もみてください。

第十三幕　～一文無しの少女～

相沢美冬（あいざわみふゆ）と第五王子カインは、
今困っていた。思い切り困っていた。
お金がないのだ。一銭もないのだ。
しかも、旅券もないのだ。
彼らがこんな目にあっている理由は、
小一時間ほどさかのぼるーー。

その日、美冬とカインは少し高級な宿の一室で目覚めた。
一人部屋を二人で使っている。一人で寝るのがさみしい、
と両方が考えたためである。
二人は宿で焼き立てのパンと野菜たっぷりのスープで
朝食をとり、市場へやってきた。今思えば、それが不幸の
原因だったかもしれない。
彼らは後にそう想うことになるが、その時はそんなことを
思わなかったので、二人は笑顔でそこへ向かったのだった。
市場はかなり大きなものだった。装飾品、服、食べ物、
なんでも売っていた。
「ミフユ、何か買ってあげるよ」
「ええ！？　いいわ、別に」
「僕が買ってあげるって言ってるんだから、いいの」
カインは半ば強引に美冬の手を引いて、
ガラス製の装飾品がある露店にやってきた。
きらきらと光を反射していて、とてもきれいだ。
「すてき……」
美冬が笑顔になったので、カインもまた笑顔になった。
「どれがいい？　なんでも買うよ」
美冬は妖精（ニンフ）の飾りがついた首飾りが

気に入り、彼に買ってもらうことにした。
　カインがわざわざつけてくれたので、
美冬は思わず赤くなっていた。
「うん、似合うよ、ミフユ！！　すごく似合う！！」
　さらに美冬は顔を赤らめた。と同時に、顔色も変えずに
そんなことを言える彼に怒りも抱く。
　自分がこんなにドキドキしているのに、彼はまったく
なんでもない事のように言っているのだ。
「カインばっかりそうやって余裕があるのね！！」
「ミフユ？」
「私は、私はどうせ経験だってないし！！　いつまでも
優しくされるのになれないし！！」
　美冬はいらいらしていた。それに何より、カインは
何もしていないのにいらだつ自分に腹を立てている。
「私、宿に帰る！！」
「ま、待ってよ、美冬」
　身をひるがえした彼女に、カインは慌てた。
何故あんなに怒ったのかが、彼には分からない。
　腕を掴んで引きとめようと手を伸ばしたが、
それより前にぶつかってきた少年がいて、
できなかった。少年は不遜な態度で、
舌を出して去っていく。
「気をつけろ、ばーか！！」
「カイン、大丈夫！？」
　美冬が機嫌を直したので、カインは少しホッとした。
「う、うん、大丈夫……」
「あーあ、やられたね、お兄さん」
　いきなり声をかけられ、振り向くと、まだ幼い少女が
そこにはいた。大人びた雰囲気の子である。
　つやのある髪を腰まで垂らしている。きらり、ときらめく

緑の瞳は、どこか妖しさを秘めいていた。
「あいつ、スリの常習犯よ。荷物を見てみた方がいいんじゃないの？」
「スリ！？」
カインはすぐさま荷物をかきまわした。……ない。
財布がない。財布には旅券も身分証明書も入っていたので、それももちろんなかった。
「お兄さんたち、行くところないでしょ？　あたしについておいでよ。
仕事と住む場所なら提供できるよ」
少女はどこか大人びた笑みを浮かべている。
二人は困ったように笑うばかりだったーー。

それが、二人が困っている理由である。
財布が盗まれ、旅券も身分証明書もないから、このまま城に帰ることはできない。金はすべて財布に入れていたから、今は一銭もないのである。
それに、あの少女も妖しかった。美しく、あどけなさをほとんど感じさせない少女。彼女は、住む場所と仕事を提供すると言ってきた。まだ名前も聞いていない。
気が向いたらここにきてね、と店の名前を書いてあるらしい紙を押し付け、少女はくすくすと笑いながら走り去ってしまった。
「どうしよう、カイン？」
「どうしようか、美冬……」
いろいろなことを考えながら、二人は首をかしげるのだったーー。

第十三幕　～一文無しの少女～（後書き）

旅行二日目にして、いきなり二人が一文無しになります。そこに現れた妖しい少女。
彼女の目的は！？　正体は何なのか！？
次回もよろしくお願いします。

第十四幕　～仕事を始める少女～

結局、相沢美冬（あいざわみふゆ）と第五王子カインは、
少女の提案に乗ることにした。
どこにも行く場所がないのは事実である。
「待っていたわよ」
少女はにっこりと、否、にやりと笑っていた。
相変わらず、謎な雰囲気である。
黒いワンピースがよく似合っていた。
「私はエルダ。エルダ＝ラーシアよろしくね」
「君、なんで僕たちに仕事を紹介してくれたの？」
カインは美冬を後ろにかばいながら言った。警戒心たっぷりの口調である。
少女はただ笑っていた。それが、なおさら彼の警戒心を高める。
「理由なんてないわ。困っているみたいだったから、進めただけよ」
少女はなんでもないことのように言う。
妖しいところがないでもなかったが、二人は少女の言うとおりにするしかなかった。
「ただ利害が一致しただけよ。私は仕事先で誰か紹介してくれって言われていたし、
あなたたちは無一文で行く場所がない」
とりあえず二人は働くことになった。仕事先のおかみさんはいい人だったが、
同時に厳しくもあり、二人は目を回しそうになりながら働いた。
美冬もカインも、働くのは初めてだったのである。
休憩時間に入るころには、もう二人はへとへとだった。
「はいよ、お茶でも飲みな」
熱いお茶を出され、美冬はお礼を言ってすすった。カインも同様だ。

続いて、お菓子も出され、二人は少し元気になった。
「おいしいです、ありがとうございます！！」
「いいんだよ。……エルダあんたもお食べ！」
「はい……」
エルダが長い黒髪を揺らして美冬の隣に座った。
きらり、と緑の瞳が光る。きれいだとおもう反面、
美冬は何故か彼女に不安を抱くのだった。
お菓子は美冬の世界にある、おまんじゅうに似た
ものだった。美冬も形くらいは知っている。
よく、相沢家の両親が、お客に出すのを
指をくわえてみていたものだ。
ほんのりとした甘さで、とってもおいしかった。
「これ、なんていうんですか？」
「マンジュウっていうらしいよ。異世界の食べ物さ」
「これがオマンジュウ……」
美冬は強い感動を覚えた。小さい頃、決して食べる
ことのできなかったお菓子が、今目の前に並べられて
いるのだ。好きなだけお食べと言われ、美冬は恐縮
しながら少しだけお菓子を味わった。
カインもエルダも、笑顔で頬ぼっていた。
「あんたたちはよく働くからいいねえ。エルダ、お手柄だよ」
「ありがとうございます、おかみさん」
エルダは笑っているらしかったが、どこかその笑顔は
ぎこちなかった。カインが珍しそうにそれを見ている。
「……やっぱり似てる」
「カイン？」
きつい目になった彼に、美冬は目を丸くした。
エルダもまた、きつい目でカインを睨み返している。
ひょっとしたら見ていただけなのかも知れないけれど、
美冬にはどちらか分からなかった。

そして、三十分が経ち、仕事が始まった。最初に働いた時
よりも、幾分楽に仕事ができる。少しは仕事の内容も覚えていた。
美冬は料理全般と皿洗い、カインが雑用全般である。
カインは違ったが、美冬はいつもエルダが隣にいた。
こつややり方を教えてくれる彼女は、とてもやさしい。
美冬は不安や違和感をあまり感じなくなり、
いつしかエルダに親しみを感じるようになっていた。
それはエルダも同じなようで、美冬にだけ
重大な秘密を打ち明けてくれた。彼女は、魔法使いでは
ないのだという。ここは、魔法大国であるから、基本
魔法使いが多い。でも、彼女は違うと言った。
「私、神子なの。神子姫なのよ。回復術が得意なの」
「あっ！！」
そう言った時に、ちょうど都合がよく、美冬が
指を切った。エルダは少し笑うと、指を取って
力を使った。瞬く間に傷が消える。
「秘密にしてね、ミフユ。私、おかみさんにも
言っていないのよ。あなたが親友だから言うの」
「わかったわ、エルダ。私たち、分かれることが
あっても親友よね？」
「あたりまえじゃない」
楽しそうに話をする二人を、カインは
どこか不安そうにみていたーー。

第十四幕　～仕事を始める少女～（後書き）

美冬がエルダと仲が良くなります。
それがなんだか不安なカイン。
まだまだ謎な少女の目的は！？
次回は美冬たちではなく、
ルーたちで贈る番外編になります。

番外編・ちび姫とちび狼のピクニック

狼男（ウェアウルフ）ルーは、フランジェールの
第五王女、フィレンカを誘って出かけた。
しっかりと小さな手を握り、歩いていく。
「ねえ、どこに行くの？」
さんざん歩かされたフィレンカは、不満そうな顔で
文句を言い続けていた。そのたびに、ルーは笑顔で言い返す。
「もうすぐだよ。黙ってついて来いって！！」
フィレンカはふくれっつらになりながらも、初めての体験に
心がはずんでいた。山道を歩くなんて生まれて初めてのことだった。
新鮮な空気が心地いい。誰も共をつれず、異性と二人きりに
なるのも初めてだった。とーー。
「きゃっ！」
ごつごつとした石だらけの道に、フィレンカは足を取られて転び
そうになった。慌ててルーが腕を掴み、倒れるのをふせぐ。
フィレンカは急に気恥ずかしくなって、突き飛ばすように
ルーの手を振り払った。ムッとなったようにルーが睨んでくる。
だが、フィレンカのように倒れはしなかったので、
彼女もまたムッとなって睨み返した。
「何でこんな山道歩かせるのよ！　あたしかよわい女の子なんだよ
っ！！」
「フィーのどこがかよわいんだよ？　姫さんだからか？」
「姫さんって言わないでよっ！！」
フィレンカはルーを殴ろうとして再びバランスを崩し、
また彼に支えられてしまった。悔しくて涙目になる。
「言わないで……姫だなんて、言わないで……」
「ごめん……」
泣きそうになりながら言うと、同じような顔になったルーが

謝ってきた。姫という単語を出されたら、フィレンカは
嫌になってしまう。兄たちは言う。王女が下々の者と親しく口
を聞くな、と。もちろん、第五王子で、実の兄である、
カインは違う。ちゃんと彼は使用人を人間として見て、
自分と同じ身分であるかのようにふるまう。
　でも、他の兄は違うのだった。彼らにとって、使用人とは
道具であり、家畜や動物にすぎない。
　だから、いつも傲慢な言動をしている。
ルーもその例にはもれず、嫌な思いをしているだろう。
　今はいないけれど、同じく雇われた、鳥少女（セイレーン）の
シーレーンも……。フィレンカはそんなのは嫌だった。
　使用人だからと差別するのは嫌だった。だから、ルーたちと
いつも一緒に行動した。最初は兄への反発だったが、フィレンカ
はルーとシーレーンを心から大事に思っていた。

　持ってきたお菓子を食べて休憩した後、二人は再び歩き出した。
今度はルーは無駄口を叩かずに歩いている。しっかりと彼女の
腕をとっていて、また転ばないようにしていた。
　フィレンカもまた黙っていた。
泣き顔を見られた恥ずかしさと、ルーがずっと口をつぐんで
いることへの反発だった。
　そうこうしているうちに、二人は橋へとさしかかった。
かなり古そうな橋である。フィレンカはためらい、ぐいっと
ルーの腕を引っ張ってしまった。ルーは青ざめるフィレンカ
に笑いかけた後、さらに強い力で彼女を引き、橋の上
に行かせた。古びた橋は、二人分の堆積がかかっただけでも、
かなり揺れた。フィレンカは悲鳴を上げ、ルーに抱きついてしまう。
　ルーの顔が、夕焼けの色と同じ色に変わった。
「フィ、フィー！　大丈夫か！？」
　フィレンカはそれどころではなくて気づかない。

目をぎゅっとつぶり、さらに強い力でルーにしがみつくばかりだった。
ルーは苦笑すると、彼女に負担をかけないために横抱きにして歩くことにした。いわゆるお姫様抱っこというやつだ。
声も上げずに震える彼女は、いつもとは違ってか弱く見える。守ってあげたいという欲求が働き、ルーは自分を深く責めた。
彼女は一国の王女である。彼女が認めても認めなくても、それは事実だ。ほんとうは、口を聞くだけでも恐れ多いのである。
いつの日からか、ルーは彼女を愛してしまったのだった。表向きはいつもと同じように軽口を言い合っていたけれど、それでも心はドキドキとしていた。
フィレンカは決して気づかないだろうし、ルーも決して口に出すことはしないけれど。
「フィー、もう渡ったよ」
「ほんとう？」
フィレンカはそろそろと降りたが、次の瞬間には胸をなでおろして息をついた。ルーもホッとして、彼女に笑いかける。目的地はかなり近かった。
「もうすぐだよ、フィー！！　行こうぜ！！」
「さっきももうすぐって言ったじゃない！」
「今度は本当にもうすぐだよ」
頬をふくらます彼女の手を取って、ルーは再び歩みを進めた。またおぶってやろうか、と冗談交じりに言うと、頬を思い切りはっ叩かれた。子供扱いしないでと睨まれる。
別に子供扱いなんてしていないのに、とルーも頬をふくらませた。だが、二人の機嫌はすぐに直った。目的地に着いたのである。
「うわああっ！！　きれーい！！」
ルーはフィレンカの歓声を聞いて、連れて来てよかったと心から思った。ルーが見せたかったのは、虹がかかった大きな滝である。水は透き通っていて、とても美しい。

ちらちらと舞う黄色や赤の葉っぱが、さらに彩りを与えていた。
まだそんなには色は変わっていない。もう少ししてから来れば、
美しい紅葉を見ることができるだろう。
「ルー！！　ありがとう、大好き！！」
フィレンカがいきなり抱きついてきた。彼女としては、
お礼のつもりだったのだろう。けれど、ルーはお礼どころか
大迷惑だった。せっかく恋心を抑えつけてきたのに、
それができなくなりそうだった。
「フィー離れろよ！！」
「何照れてるのよ、いいじゃない！！」
ルーはさらに強く抱きつくフィレンカを突き飛ばしたくなった。
だが、そんなことをすれば、彼女は転んでしまうだろう。
……好きな相手に抱きつかれて、平然としていられる訳はない。
ルーの頭はぐるぐると回っていた。
あっ、とフィレンカの驚いたような声が上がった。
ルーは後にこのことを後悔することになる。
だが、この時はそんなこと思う余裕はなかった。
体が勝手に動き、心が命じるままに彼女の唇を奪ったのだ。
フィレンカの顔がしだいに紅葉のように赤くなっていった。
そこで我に返り、ルーは自分を殴りつけたくなる。
無理やり女の子に、好きな相手に口づけしたのだ。
しかも、相手は王女様である。
「ご、ごめん……！！」
慌ててルーは彼女を下ろすと、青ざめて謝った。
キッとフィレンカがその顔を睨みつける。
「何で謝るの！？　私が王女だから！？　馬鹿にしないでよっ」
「フィー？」
「謝るくらいなら、あんなこと……キスなんてしないでよっ！！」
泣きじゃくる彼女に、ルーはただ謝ることしかできず、
城に帰った後もフィレンカは泣き続けていたーー。

番外編・ちび姫とちび狼のピクニック（後書き）

彼女たちの恋が始まります。次回はちゃんと
本編です。二人の恋がどうなったかは、
別の番外編で明かしたいと思います。

第十五幕　～攫われかける少女～

相沢美冬（あいざわみふゆ）は、第五王子カインと働いていた。
だが、彼とは違う役職である。美冬は料理全般と皿洗い、
カインは力仕事や雑務全般だった。
「ミフユ、ここはこうやるのよ」
一緒にやるエルダと美冬はかなり仲が良くなっていた。
それを見るたびに、何故かカインは不安を隠せない。
彼女は何か隠している気がしてしょうがないのだ。
「ねえ」
「うわっ！！」
カインは声をかけられて飛び上がった。
いつの間にか、そこにはエルダがいたのである。
「そんなに驚かなくてもいいじゃない……」
「何か用？」
気恥ずかしいやら苛立つやらで、
カインは思わずぶっきらぼうに言い放った。
それを見ていた美冬が、怒ったように言う。
「カイン、そんな言い方はないんじゃないかしら」
「美冬……」
カインは悲しそうに彼女を見つめると、
歩き出した。ぐいっとエルダがその腕を
掴み、睨むような視線を向ける。
「ねえ、話があるんだけど」
「早く言ってくれない？　僕も仕事があるんだけど」
カインは苛立つ気持ちを抑え込むのに大変だった。
彼女は似ている。真夜中に襲撃してきた少女
に、非常に似ているのだ。
彼女だと断定する理由も、証拠もないし、

美冬を心配させたくないから言わないけれど。
だが、それでもカインはこの少女は
あの時の子ではないかと思っていた。
だから、ついつらく当たってしまうのである。
「カインはミフユとはどういう関係？」
「なっ！？　か、関係ないよ、君には！！」
「関係なくはないわ。私はミフユの友達よ」
カインは思わず舌打ちしたくなった。
美冬が見ていなかったら、きっとやっていただろう。
顔が火を噴いたと錯覚しそうなくらい熱を
持っていた。美冬の顔も同じくらい紅い。
「婚約者だよ。それが何？」
「どうもしないわ。聞いてみたかっただけよ」
にっこりとエルダは笑っている。
何故かカインにはそれが不気味な笑みに見えた。
仕事があるからと二人から離れる。
ムッとしたように、美冬はカインを睨みつけていた。
「ごめんなさいね、エルダ。カインはちょっと
疲れてるみたい……」
「私は気にしてないわよ。きっと、彼ヤキモチを
焼いているんじゃないかしら」
「ヤキモチ？」
「私たちが仲がいいからヤキモチ焼いてるのよ」
美冬の顔が再び赤らんだ。頬に手を当て、
エルダを涙目で睨みつける。
「もうっ、からかわないでよ」
「あら本気で言ったのに」
くすり、と笑った顔は、やはり美冬に
とっては安心を抱かせる笑みだった。
彼女のそばにいるとなんだか安心できる。

もちろん、カインのそばの方が心地よいけれど。
美冬には何故カインが彼女に辛く当たるのかが
分からなかった。エルダはヤキモチだと言ったけれど、
どうしてもそうとは思えない。
いつもは温厚な彼にしては、非常に珍しいことだった。
「こらっ、何さぼっているんだい！！」
「ご、ごめんなさい……」
「今やるわ、そんなに怒らないでよ」
怒鳴られたので、二人はそれ以上の会話を
続けることができなかった。
美冬は、生まれて初めて目が回るほどの
忙しさを味わい、夜寝る頃にはもうくたくただった。
エルダと同じ部屋をあてがわれたが、
彼女は買い物に行くと言うので、一人で先に
寝ることになっていた。すこやかな眠り
が彼女を支配する。
美冬は熟睡していた。揺り動かされても、
ひょっとしたら起きないかもしれない。
とーー。
「お迎えにまいりましたよ、お姫様」
美冬が寝ている部屋の窓辺に、少女が一人、
立っていた。フードと口もとのマスクで
顔を隠している。闇にまぎれられる
ような黒衣の姿だった。
「さあ、こちらに……」
少女は部屋に降り立つと、美冬を抱き上げて
また窓辺に移った。美冬は眠っていて起きない。
このまま攫われてしまうのだろうか。
その時だった。
「ミフユに何をしてるんだ！！」

そこに駆け付けたのは、カインだった。
少女は舌を打ち、一旦部屋に戻る。
カインは眠れなくて外を散歩している
最中に、彼女が誘拐されようとしている
ところを発見したのである。
窓によじのぼると、カインは部屋に入り込んだ。
「な、何！？　きゃあああああああっ！！」
カインの声で、ようやく美冬は目覚めて暴れ出して
しまった。再び舌打ちの音が響く。
「大人しくしろ、殺すぞ！！」
「きゃあああああああっ！！」
少女は押し殺したような声で脅したが、
すっかり恐慌状態に陥っている
美冬は叫ぶばかりだった。
とりあえず美冬を下ろし、
部屋の外へと飛び出す。
その後を、カインが慌てて追っていった。
「よくも、ミフユを……！！」
「っきゃあああっ！！」
カインは巨大な炎を少女に浴びせかけた。
少女はよけたけれど、少しかすってしまったようだった。
そのまま少女は窓から落下する。
カインはぎょっとなって窓から外をのぞいたけれど、
少女の姿はそこにはなかった。
「カイン……」
「ミフユ……」
部屋に戻ると、今にも泣きそうな顔をした
美冬が抱きついてきた。カインは優しく
彼女の背に手を回す。
「怖かったね、もう大丈夫だよ」

「ありがとう……。ひどいこと言っちゃってごめんね……」
「いいんだよ……」
二人はそのまま抱きあい、エルダが帰ってくるまで
そのままでいたのだったーー。

第十五幕　～攫われかける少女～（後書き）

更新が遅れてすみませんでした。
美冬がさらわれかけます。
さらった犯人は、謎の少女。
彼女の正体は！？
次回もよろしくお願いします。

第十六話　～帰りたい少女～

今日は美冬たちはお休みだった。
昨日のことを聞いたおかみさんが、
今日は休んだらどうかと言ってくれた
のである。
美冬はカインと一緒に町を歩いていた。
おかみさんが渡してくれたお駄賃を
もって嬉しそうな顔である。
旅行をしていた時よりも、
その顔は楽しそうだった。
カインも最近では珍しく笑顔を浮かべていた。
エルダは今日はそばにはいない。
そのことも、彼にとっては笑顔になった
原因だったかもしれない。
美冬はそのことに気が付いていないので、
カインに文句を言うことはなかった。
「ミフユ、今日はどこに行く？」
カインにそう聞かれ、美冬は笑顔で
振り向いた。眩しいほどの笑顔である。
「またこの前食べたお菓子食べたいの。いい？」
「もちろんだよ！！　早速行こうね！！」
さりげなく美冬と手をつなぎ、紅くなる
彼女に笑いかけながらカインは歩き出した。
紅くなりながらも、美冬は手を振りはらったりしない。
ただ黙って歩いている。
と、彼女が急に口を開いた。
「カイン、あの、ね……」
「どうしたの、ミフユ？」

「こんなこと言いたくないんだけど、
どうしてカインはエルダに辛く当たるの？」
カインは瞬時に機嫌を悪くし、幾分
乱暴に美冬の手を放した。
睨むように見られ、美冬は怯えたような
視線を彼に向ける。
カインは息を吐くと表情を少し和らげ、
迷うように目を泳がせたが、やがて
口を開いた。
「似てるんだよ、あの子は」
「え？」
美冬は戸惑ったような顔の後、
しっかりとカインを見つめてきた。
カインも見つめ返し、二人の目が合う。
「君には言ってないし、分からないと思うから
言うね。君、城にいたころも攫われそうに
なっていたんだよ」
そんなことは初耳だった。
美冬は目を見開き、言葉も発せないほどの
驚きに心底困惑する。
「その時は、部屋に入る前に僕とフィレンカで
その子を撃退しちゃったけどね。
……かなり強かったよ。護衛が歯も立たないくらいね」
その時のことを思い出したのだろう、カインの顔
には苦々しいものが広がっていた。
彼曰く、その時の少女とエルダが似ていたらしい。
だが、本人だと言う保障はないし、それだけの
ことで拒絶されるエルダも迷惑だろう。
「でも、まだ、本人だって分かってないんでしょう？」
「うん……。その子の名前も知らないからね」

美冬は悲しげな顔になると、言い聞かせるように
カインに言った。
「私、エルダの友達だから、カインが彼女と
ケンカしているのを見ると辛いのよ。
仲良くしてくれないかしら？」
「ミフユが……そういうなら」
カインはまだ警戒しているらしいが、
とりあえずは提案をはねのけたりしなかった。
再び彼女の手を取り、この前お菓子を食べた
屋台に行く。二人分を買うには足りなかったので、
一つのものを二人で分けた。
一個ずつ買って食べた時よりも、
何故か分け合って食べた時の方がおいしく感じた。

そして、二人は店に戻ることにした。
心配そうな顔で迎えたのは、エルダだった。
「もう帰って来たの？　まだいいのに」
「でも、仕事たくさんあるでしょう？」
「いいからもう少し外にいてよ」
店には戻ったものの、追い出されるようにして
外に戻されてしまった。かなり忙しいそうな
様子だったが、エルダはまだ美冬が心配らしい。
仕方なく、二人はふらふらと通りを歩くことにした。
お金は使い切ってしまったので、いろいろなものを
眺めて過ごす。飴を売っている露天を通りがかると、
店のお姉さんが一つずつ飴玉をくれた。
あまい飴玉を舌で転がしながら二人は笑顔になる。
「フィレンカたち、どうしてるかな……」
「元気にしてくれているとは思うけれど……」
ふと、二人は城に置いてきたものたちの

ことを思い出した。心配しているかもしれない。
ずっと城へは帰っていないのだから。
城に帰るにもお金はないし、旅券も何もかも
ないから関所も通れない。
ここで働いてお金をためて旅券も
購入するしかなかった。
フィレンカ・ミステル・ルー・シーレーン、
そしてメイドたち……。
しばらく会っていないものたちの顔が
次々と浮かんできた。
二人の目には涙がにじみ、いつ帰れるのかと
帰郷の念が増すばかりだったーー。

第十六話　～帰りたい少女～（後書き）

二人がいつ城に帰れるかはまだ
決まっていません。大事なもの
たちのことを考える二人。
次回もよろしくお願いします。

第十七話　～困惑する少女～

「ど、どうして、どうしてあなたが！？」
美冬は驚いたように黒い瞳を見開いていた。
それを見返すのは、無表情でこちらを見つめる少女。
その目にも何の感情もない。
「さあね」
やっと話したその声にも、いつもとは違って
感情が込められていない。否、押し殺しているのだろうと思わせた。
「私はあなたを迎えに来た。それだけよ」
力強い手が彼女の腕を掴む。美冬は悲鳴を
上げることもできないまま、朝からの行動を思い出していた。

相沢美冬（あいざわみふゆ）は一日休んだ後、
カインと共に再び仕事に戻った。
エルダはまだ心配そうだったが、今度は
追い払いもせずに仕事を始めていた。
カインはもうエルダを拒絶しなかった。
完全にわだかまりが消えた訳ではなさそうだったが、
それでも訳もなく声を荒らげたり嫌な顔をしたりは
しなくなった。エルダもニコニコとしたように
彼に対応していた。けれど、カインは何故か
不安が襲うのを美冬には話さなかった。
どうしても気になってしまう。
だけど、彼女が悲しむだろうから言わない。
「カイン！！　こっちを手伝っとくれ！！」
「あ、はいっ！！」
おかみさんに声をかけられ、カインは慌てて
そこに向かった。料理はしたことがないので

不安な気持ちになるが、それは杞憂だった。
彼女が頼んだのは力仕事である。
ケーキを作る際のかき混ぜる作業には
かなりの力がいるので、エルダや美冬ではなく
彼が狩りだされたのである。
カインは魔術で少し力を上げながら
見事なめらかな舌触りのクリームを
作ることができたという。
おかみさんは味見と称して
ちびケーキを三人にくれたので、
彼らは笑顔で口々においしいと言いながら食べた。
騒動が起こったのは、仕事が終わってからのことだった。
おかみさんに頼まれてカインが買い物で外に出ていた時だった。
美冬はエルダに呼び出され、彼女の部屋で一人待っていた。
彼女が読んでいてと渡した本を読みながらベッドに腰かけている。
「遅いわね、エルダ。どうしたのかしら……」
急に強い風が吹いてきた。美冬は寒くなり、窓に近づいて
しめようとする。と、黒いマントが視界を覆った。
悲鳴を上げる間もなく手を掴まれる。
恐怖のあまり美冬は暴れ、たまたま手がフードつきマントの
フードにあたり、それが外れた。
美冬はぎょっとなって立ち尽くす。
「える……だ……！？」
その顔は明らかにエルダだった。信じていたのに。
絶対に彼女ではないと思っていたのに。
「ど、どうして、どうしてあなたが！？」
驚いたように彼女が言っても、エルダの表情は変わらなかった。
黒い目を見張った美冬とは正反対に、彼女の顔はひどく冷たい。
「さあね」
押し殺したような声が美冬の耳に響く。

「私はあなたを迎えに来た。それだけよ」
美冬はどうしたらいいのか分からず頭が混乱した。

それで今に至る。
美冬を昨日誘拐しようとしたのは、心配してくれていたはずのエルダだった。
騙されていたのだ、美冬は。
だが、彼女は信じたくなかった。
信じられるはずがなかった。
「嘘でしょう、エルダ。ふざけているのよね？
あなたが私を攫う訳ないわよね？」
「甘いわね、お姫様。それとも、いじめられっ子の美冬と言った方がいい？」
さあっ、と背筋が寒くなった。彼女は知っている。
話したこともないはずのことまで知っているのだ。
「騙していたの？」
黒い目からとめどなく涙があふれた。
くすり、とエルダの口元が笑う。
「騙した？　人聞きが悪いわね。嘘なんか
ついてないわよ。私は姫巫女っていうのは本当。
あ、ついていたわね。利害が一致したからあなたを
ここに連れて来たのよ」
あくまで淡々とした声でエルダは語る。
美冬はショックを受け、そのまま下がろうとしたけれど、手を握られたままなのでできなかった。
「いいこと教えてあげるわ。あの男の子、私が雇ったの。おかみさんもね。ここは宿屋っていうのは本当だけどね」
「放して……」
「いやよ。やっと捕まえたんだから、私の救世主。
死にたいんでしょう、あなた。

じゃあ死んでもらいましょうか」
「放して！！」
「きゃあああっ！！」
美冬が叫んだ瞬間、氷のつぶてが彼女を襲った。
もちろんやったのは彼女ではない。
帰ってきたカインだった。
憎々しげに瞳が輝く。舌打ちしてエルダは
肩から流れる血をぬぐった。
「やっぱりお前が、ミフユを攫おうとしたんだな！！
ミフユを放せ！！　彼女に触るな！！」
「くっ！！　……しゃべり、すぎたか……。
サフェナ！！」
ガツンッ、という鈍い音がした。
エルダの指示を聞いて、いつの間にかいた
あの時の少年がカインを棒で殴ったのだ。
「カイン！！」
「ちく……しょう……！！」
「サフェナ！！　そいつを縛っておいて！！」
「了解です、姫様！！」
「カイン！！　カインーーーー！！」
エルダは軽々と美冬を担ぎあげた。
涙を浮かべながら美冬が悲鳴を上げる。
パチンッ、とエルダが指を鳴らすと、
二人の姿はそこから消え去ったーー。

第十七話　～困惑する少女～（後書き）

美冬が攫われてしまいました。
犯人はエルダです。
次回はカインが活躍します。
フィレンカたちも再登場ですので、
次回もよろしくお願いします。

第十八話　～攫われた少女～

第五王子カインは、目覚めた時
一瞬最後の場面が思いだせなかった。
頭に鈍痛が走り、ようやくはっきりと覚醒する。
自分の婚約者であり、愛した少女、アイザワミフユは誘拐された。彼女が友と信じた、エルダという少女によって。カインは彼女の協力者に頭を殴られ、気絶していたのだった。
「ミフユ……」
立ち上がりかけて呻くと、足音が聞こえた。
カインは振り向いてその人物を睨むつける。
「誰だ！！」
人物はためらいがちに彼を見つめた。
その人物は、エルダに雇われていたというおかみさんだった。
「何の用？　僕を笑いに来たの？」
「手当てしに来たんだよ。
あの子を、エルダを悪く思わないでおくれ」
「悪く思えないはずがないだろ！！
あいつはミフユを攫ったんだ！！
事情があったって許せるものじゃない！！」
叫んだ後、カインは頭を押さえて呻いた。
バタバタといくつかの足音が響き、見知ったものたちが現れた。
「フィレンカ！！　ルー！！　皆！！」
そこにいたのは、カインの実妹・フィレンカ、美冬の親友であるルーとシーレーン、
そしてカインの幼馴染であるアクアだった。

「お兄様、助けに来たわ！！　早く帰りましょうよ」
フィレンカは以前見た時よりも大人びて見えた。
ルーがその手を握っているのを目ざとく見つけたが、
あえてカインは黙っていた。
「お姉さまは？」
「あれ、ミーがいないじゃん」
カインはためらうような様子を見せたが、
口を開いて事情を説明した。
「攫われた……」
『え？』
全員の声が見事にかぶった。カインはため息をつき、
もう一度説明する。
「美冬は攫われたんだーー」
『ええええええええっ！！』
再びはもった全員の悲鳴がその場に響き渡ったーー。

その頃、美冬はエルダに連れられて彼女の
故郷に来ていた。エルダの力はかなり強く、
美冬には逃げることなどできない。
それに、エルダの協力者の少年が片手を握っていた。
「エルダ、私をカインのもとへ帰して！！
帰りたいの！！」
「駄目よ。大事な人柱を逃すものですか」
エルダは彼女が世界を呪い、自分の運命を
呪った頃からずっと狙いをつけていた。
自分の死を願っていた美冬。
だから構わないと思って召喚しようとしたのに、
先に魔法大国の王子が召喚してしまった。
その後も彼女を狙って襲撃をかけたが、
魔法大国の人間にはかなわずに彼女を

連れていくことができなかった。
　そんな時に聞こえたのが、美冬と王子が
婚約旅行をするという話だった。
　だからエルダも出かけ、手ごろな孤児の
少年と中年の女を雇った。
　そして、エルダは巫女姫としての任務をはたした。
村のために、死んでもらう生贄、人柱を
連れて来たのだ。
「村長、人柱です」
「エルダ、お願い！！　私を帰して！！」
「うるさいな、黙っていてくれる？」
　闇の色をした光がエルダの手から放たれた。
美冬は直撃を受けて倒れ込む。
　彼女が気絶する寸前見たのは、彼女の
悲しげな顔だったーー。

　アクアが作ってくれた水枕を額に
あてながら、カインはエルダが雇ったという
女性の話を聞いていた。
　金で雇ったという話だったが、
エルダは何でも彼女に話していて、
彼女はまるで本当の娘のように感じていたという。
「あの子だって、本当は辛いんだよ。
ずっと一緒にいたんだ。情が芽生えないはずがないだろう」
「でも、エルダは美冬を攫ったーー」
「あの子は巫女姫なんだよ。責任も義務もある。
だからって、やっちゃいけないことだけどね」
　ルーたちは黙っていた。彼らはエルダの事を知らない。
だから何も言うことができなかった。
「ミフユ……お姉ちゃん……」

ぽつりとシーレーンが呟いた。甘い香りのお菓子がたくさん出されていたけれど、誰も手をつけることはなかった。ただ悲しげにうつむくばかりだった。
「あなたは、知っているんですか？
エルダの居場所を……」
「知っているよ」
カイン以外の全員の顔が輝いた。アクアだけは、その後で顔を赤らめてそっぽ向いたが。
「あの子は、そこで彼女を生贄にするつもりだよ。早く行っておあげ！！　間に合わなくなるよ！！」
「あなたは、エルダの味方ではないんですか？」
カインはあくまで冷静だった。女性はうつむく。
「味方だよ。このままミフユを生贄にしたら、エルダは一生後悔する。あたしは、あんたたちよりエルダと一緒にいた時間が長いんだ。そのくらい分かるよ」
カインは黙った。シーレーン、アクア、フィレンカ、ルーを見つめる。彼らはしっかりと頷いた。
「一緒に来てくれる？」
『もちろん！！』
全ては彼女を助けるために。
全員は団結して彼女を救うために動き出したーー。

第十八話　～攫われた少女～（後書き）

執筆が大幅に遅れてしまいすみません。
それと、カインが活躍と書いていたんですが、
あまり活躍できませんでした。
それは次回に見送ります。

第十九話　～神の村の巫女～

神の村、セレンディス。
それがエルダの故郷だった。
エルダは神の愛し子、村の巫女姫であった。
彼女は生まれつき巫女だった。
だが、彼女にはその代わり友がいなかった。
？巫女？として必要とされても、一人の少女として、
？エルダ？として必要とはされなかった。
それでもエルダは村人を愛し、彼らのために
出来る限りのことをやり、村を守った。
そんな彼女が出会ったのが、相沢美冬だった。
エルダは最初彼女を？生贄？としてしか見ていなかった。
最初に見た時は、ボロボロの恰好で儚げで、
死にたいと心から願っているような状態だった。
エルダは同情する半面、苛立つような気持ちさえも
抱いていた。何故やりかえさないのだ、この娘は。
やりかえして、同じことをやって、苦しめてやればいいのに。
美冬は一向にやりかえす気配もなく、ただ逃げて悲しんで
世界と自分の運命を呪うばかりだった。
しかし、その目も心もきれいなままだった。
そのことがさらにエルダの心を騒がせた。
巫女として生きていても、エルダの心はいつでもざわざわと
騒いでいる。誰にも相談することができず、エルダは
いつしか心に闇を抱くようになっていった。
彼女だってもっと汚れればいい。生きているのに、
死にたいと願うなんて許さない。こんなにきれいなまま
で死にたいなんて許さない。
だから、エルダは美冬を召喚しようとした。

死にたいのなら生贄として使ってやろうと思ったのだ。
ふつうは清らかな乙女、巫女がなるのが普通だったし、
エルダも幼いころからその覚悟だけはしてきたのだが、
彼女には後任がいなかった。妹も親もすでになく、
村の人間にも資格を持った者がいない。
エルダを失うということは、神の加護、村の後ろ盾を
失くすると言うことだ。猛反対に遭い、彼女は生贄に
なることができなかった。そこで目を付けたのが、
他の清らかなる乙女を代わりに生贄にするという手である。
生きる意志をなくし、かつ清らかな心を持つ乙女。
相沢美冬は資格も条件も申し分なかった。
召喚しようとしたけれど、彼女は別のものに召喚されていた。
魔法大国フランジェールの、第五王子カイン。
彼が彼女を召喚したのだ。ボロボロの恰好で現れた少女に
彼は同情し、いつの日か愛し、彼女を自分の花嫁として
扱うことに決めていた。何故エルダが知っているのかというと、
こっそりと様子をうかがっていたからだ。
美冬はしだいに彼に心を開き、友達もでき、明るくなっていった。
もう死にたいなどと思いもしないだろう。
エルダはゆがんだ想いで彼女を見つめていた。
幸せになった彼女を嬉しく思う反面、何故かひどいめにあわせたいと
思ってしまうのだった。エルダは心をおさめようと努力をした。
そんなこと思ってはいけないと、彼女以外のものを生贄に
しなければならないと。だけれど、他には条件にあてはまるものは
一人もいなかった。生贄は一人でなくてはいけない。
たった一人、清らかなる乙女を生贄にしなくてはいけない。
困ったエルダは、心を押し殺して美冬に近づいた。
協力者を雇い、美冬たちを働かざる状況まで追い込み、
彼女の親友という役割を手に入れた。
そして、彼女の信頼をもっとも得た頃に、

彼女は美冬を攫ったのだった。彼女はエルダを責め、泣いた。
心が痛まなかった訳ではない。でも、村のためと割り切り、
エルダは彼女を村に連れて行ったのだったーー。

第十九話　～神の村の巫女～（後書き）

すみません、今回もカインの活躍が
書けませんでした。いつ書けるかはわからないので、
まだ未定にしておきます。でも、絶対に書きあげるので。
次回は美冬の新たなる生活編です。

第二十話　～神の村ですごす少女～

相沢美冬は果物を食べながら椅子に座っていた。
果物はどんどん並べられていく。
頭がぼうっ、としていたけれど、彼女は何も考えずに
果物を次から次へと口に運んでいた。
おいしいともまずいとも感じない。
ただ、命じられたかのように口に運ぶだけだった。
みずみずしい果物はとてもおいしい。
「生神様、お腹ははりましたか？」
と、一人の少女が声をかけてきた。
美冬はその少女の名前が思い出せない。
だけど、お腹はいっぱいなので頷いた。
「そうですか、それはよかったです」
「生神様って私のことなの？」
「そうです。あなたは、この世に並ぶものがいない、
神聖な生神様なのです！！」
少女がそう言うと、他の者たちも「生神様！！　生神様！！」
と敬うように美冬に言い始めた。
美冬はいい気分になり、にっこりと笑う。
良く分からないけれど、いいものなのは確かだ。
美冬はあまり深く考えることがなくなっていた。
考えようとすると、頭がひどくぼうっとなってしまうから、
考えることができないのだ。
だけど、心の奥でこれでいいという声もする。
このままで幸せになれるのなら、もういいじゃないか、と。
思い出せないことも何もかも捨てて、ただ言うがままに
過ごしていれば美冬は幸せになれる。
それは甘美な誘惑だった。

少女の顔がひどく悲しげになったのにも気づかず、
彼女はにこにことしながら部屋に連れて行かれた。
　彼女は何も覚えていない。生神の意味さえ知らない。
楽しいものの後に待っている恐怖さえ、何も
知らずにそこにいるのだったーー。

　エルダは悲しげな想いで美冬を見つめていた。
美冬の記憶消し、思考能力を低下させたのは
彼女の仕業である。村のためだったとはいえ、
ひどいことをしたという免罪符にはならない。
　幸せだった彼女を不幸に陥らせたのは
エルダだ。そのことを、エルダはごまかすつもりも、
正当化する気にもならなかった。
　もし、すべてが明かされた時、美冬やカインが
自分を裁くのならばあえて罰は受けよう。
　それが私の使命だ。
エルダはそれ以上は何も言わず、美冬の手を取って
部屋に案内した。こぢんまりとしていながらも、
きれいに飾られた部屋だった。
　この村では一番に上等なものである。
最初村人は反対したけれど、エルダと村長が
言い含めて了解させたのだった。
　彼女は死ななくてはいけないのだから、
それまで思い出作りをさせてあげて、と。
　村人はそれ以上の文句を言うこともなく、
黙って従ってくれていた。
　美冬はただにこにことしているだけで、
それがエルダの心を痛ませる。
　だけど、エルダはそんなことを想ってはー
いけないと自分をいさめた。自分のせいなのに、

そんなことを想ってはならない。
「美冬……？」
ためらいながらも、エルダは声をかけてみた。
ぼうっ、とした目が彼女を見る。
「なあに？」
美冬は明らかに様子がいつもとは違っていたので、
エルダは悲しげな顔をすると、「何でもない」と
返して部屋を退出した。
もう後戻りはできない。
村のためにも、彼女は死ななくてはならないのだ。
「ごめんね……ごめんね……、美冬ッ……」
目からぼろぼろと涙をこぼしながら、エルダは
美冬が来世は幸せになれるようにと祈るのだったーー。

第二十話　～神の村ですごす少女～（後書き）

美冬は記憶をなくして神の村で
過ごしています。美冬の状態とその後に、
胸を痛ませるエルダ。
美冬は本当に人柱にされてしまうのか！？
次回もよろしくお願いします。

第二十一話　～変わっていく少女～

第五王子カインは、仲間とともに
神の村に向かっていた。
アクア、ルー、シーレーン、フィレンカ、
ミステルで美冬を救出する部隊は組まれている。
美冬つきのメイドたちも行くと言ったけれど、
危険なので城に残ってもらっていた。
（待っててね、ミフユ……ッ！！）
カインは不安そうな彼女の顔を思い浮かべ、
ぎゅっと拳を握りながら心中で叫んだ。
「お姉さま、きっと悲しんでいるでしょうね」
「ミー……」
「ミフユお姉ちゃん……」
三人も心配そうな顔をしている。
アクアは一見何でもないような顔を
しているように見えたが、眉がしかめられていた。
きっと、口には出さないけれど美冬を
かなり心配しているのだろう。
彼らはすぐに村に乗り込んだ。
門の前には門番がいて、ぎょっとしたように
全員を見ていた。門番とは言っても、
明らかに戦闘なれしていない、村人のようだった。
着ているのも、鎧などではなく、薄汚れた服だ。
武器も木を削って作ったらしい槍だった。
「だ、誰だ、貴様たちは！！」
門番はアクアたちに木の槍を向けて来た。
ため息をついた後、アクアがすっと彼の前に手をかざす。
大量の水が彼に襲い掛かった。

村をそのまま埋め尽くさんばかりの勢いの水が
その場にあふれだす。
悲鳴を上げ、彼はそのまま水に飲まれて
もがきまわった。
アクアはちょっと悲しげな顔になると、
「ごめんね」と小さく言う。
フィレンカたちは男の行動に目を見張っていた。
彼女たちには何も見えなかったのだ。
男は何もないところで悲鳴を上げ、
まるで苦しむかのようにのたうちまわっていた。
そう、このアクアの技は、幻術なのだ。
幻の水を出現させ、男を溺れさせたのである。
動かなくなった男が、ただ気絶しただけで
あることを確認してから、彼らはまた歩き出した。

その頃ーー。
相沢美冬（あいざわみふゆ）は、エルダと共にいた。
話をしていて、彼女の顔は嬉しそうだ。
だが、エルダだけはせっぱつまったような、
話さなくてはまるで死んでしまうかの錯覚を
受けるような、そんな表情だった。
美冬はそれには気づいていないらしい。
エルダは本心を言うならば、ここには
いたくはないのだった。
美冬に対する後ろ暗い気持ちや、
悲しみを味わいたくないから。
だが、自分は巫女だ。
我慢しなくてはならない。
美冬が話したいというのならば、
無理をしてでも話をするほかない

悲しい気持ちを打ち消すかのように、
エルダは声を張り上げて話し始めたーー。

その頃、カインたちは村人たちと戦っていた。
なんとか門番は倒したものの、迷ってしまい、
村人たちが住むところにやってきてしまったのだ。
「皆、殺すんじゃないぞ！！　大怪我もさせるな！！」
「分かったわ！！」
「了解です、お兄様！！」
カインは全員に指示を飛ばしながら
強化した拳で村人たちをなぎ飛ばしていた。
シーレーンが歌で何人か眠らせ、
ルーが爪をしまった拳で村人たちを気絶させる。
アクアは何度も幻術を使用していた。
フィレンカはなるべく魔術をセーブした
力を使い、村人を倒していく。
「かなりいるわね……私、疲れたわ」
と、ここでアクアがリタイアした。
幻術はかなりの精神力と集中力が
使われる。なので、長時間の使用は難しいのだ。
シーレーンも歌いすぎてのどを抑えていた。
戦える人数が半分に減り、そのせいで何人かを
逃がしてしまった。やがて、顔をひきつらせた
エルダが彼らの前に姿を現した。

「私の村人たちを傷つけたわね」
「美冬を傷つけたお前に言えることか！！」
あくまで冷静な声を出そうとする彼女に、
カッとなってカインは怒鳴り声をあげた。
その声に驚いたのか、エルダの後ろにいた

少女がひょっこりと姿を現す。
　その顔を見た時、カインの表情が驚きに染まった。
そこにいたのは美冬だった。
　カインの愛しい少女。
愛する婚約者がそこにいたのだ。
「エルダ、美冬お姉さまを返してよッ！！」
　フィレンカが鋭い声をあげる。
エルダは嫌な笑い方をすると、あっさりと了承した。
「いいわよ。ただしーー」
「ただし、何よ！？」
　苛立つような声を上げたアクアが立ち上がる。
さらにエルダは笑みを深くすると、こう言った。
「美冬が、生神様が、それを望んでいるなら、
私も止めはしないわ。ねえ、生神さま？
　彼らを知っている？　彼らと帰りたい？」
　何か含みがあるのに気付いてカインが眉をひそめる。
美冬は全員をちらりと見ると、首を振って
彼らを知らないことを示し、帰りたくないことも示した。
「あなたたち、誰？　私は分からないわ」
「ミフユ！？」
「お姉さま！？」
「ミー！！」
「ミフユお姉ちゃん！！」
　カインたちは悲鳴のような声を上げた。
アクアだけは、こいつが何かしたといわんばかりに
エルダを睨みつけている。
　しかし、エルダはただ指示を出しただけだった。
「あなたたち、お客様に退出願うのよ」
『はいっ！！』
　追い出せと命じられ、ずらずらと村人が彼らを

取り囲んだ。青ざめたカイン達は動けない。
「ミフユ、本当に僕達が分からないの？
ミフユーーーーー！！」
どれだけ叫ぼうとも、彼女は彼の方を
一切見ようとはしなかったーー。

第二十一話　～変わっていく少女～（後書き）

記憶を消されているため、
カインたちが分からない美冬。
彼らの運命は！？
そして、美冬は、エルダは
どうなるのか！？
次回は生神編に突入します。

第二十二話　～生神様の生活と村の不満～

相沢美冬（あいざわみふゆ）は、エルダに起こされて
着替えさせられていた。白い清らかなローブは
彼女の黒い髪によく映えている。
エルダは巫女としての仕事があるというので、
今は違う少女といた。美冬のメイドとして働く子らしい。
何かあればいつでもおっしゃってください、と笑う
まだ幼い少女に、美冬はにっこりと笑い返した。
少女は美冬が生贄だということを知らないらしく、
かわいらしく笑い返すと頬を赤らめていた。
あまりにきれいな？生神様？に見惚れてしまっている。
美冬はそんなことには気づかず、甘い飲料水を持ってきたり
と笑顔でてきぱきと働く少女をただ見つめていた。

一方、エルダは仕事などしていなかった。
？生神様？だということを心から信じている美冬。
生贄だということを全く疑いもしない彼女を
真顔で見ていることなどできなかった。
思わず泣きそうになってしまい、仕事があるからと逃げたのだ。
「美冬……」
いじめられ、存在を無視され、不幸せだった少女。
やっと幸せになれたはずだったのに、自分のせいで
こんなことになったのだ。
きっと、思い出したならばエルダを怨むだろう。
怨むなら怨んでもいい。
私は、村を守る。それが、巫女としての、任務なのだから。

美冬は少女に食事の用意をされながら

椅子に腰かけていた。
少女の他は誰も美冬に声をかけたりしなかった。
村の資源は決して豊かではない。
それを、？生神？というのは名ばかりの
生贄のためにささげているのだ。
彼女を憎々しく思わない訳はない。
だが、本当のことをバラすわけには
いかないのでそのままにしていた。
今日の食事は、分厚く切ってまんべんなく焼いた
お肉と、野菜がたっぷりと入ったスープ、
焼き立てふわふわのパン、たくさんの果物だった。
少女はお肉を切り分けたり、果物を食べやすい大きさに切ったり、
ほんとうにかいがいしく美冬の世話を焼く。
村人はそれを苦々しく思っているのは間違いなかった。

その日の食事の後、エルダの住居には村人が殺到した。
村長までがいる。いないのは、美冬を世話している少女と、
子供ばかりだった。
若いものも、中年のものも、年老いたものさえも、
彼女に必死に訴えかけてきた。
「エルダ様、私、もう我慢ができません！！
あんな生贄の、えたいの知れない小娘に
あんなによくしていいものなのですか！？」
中年の女が悲鳴のような声をあげていた。
何故あんな娘のために自分たちが我慢して、
食事の量を減らさなければならないのか。
その顔にははっきりとそう書かれていた。
さらに、まだ若い娘も叫ぶ。
「いつまでこんな馬鹿げたことを続けるのですか！！
早くしないと、村の資源はなくなってしまいます！！」

「エルダ様、早く生贄の儀式を！！」
儀式を、と全員が叫び始める。
エルダは冷めた目でそれを見つめていた。
皆自分勝手なものだ。巫女としての責任も、
彼女がどんなひどい目にあってきたのかも知らないくせに。
今まで彼女たちは、資源が少なくなるまでは、
神の村の人間として何不自由なく暮らしていた。
それなのに、少し生活が苦しくなったといっては
こちらに抗議してくるとは……。
資源が少なくなったのは、元々自分たちのせいではないか。
ろくに働かず、神の村の人間であるということに
あぐらをかき、何一つ責務をこなさなかった。
だから神は資源を減らしたのだ。
神の怒りを買ったのは、美冬ではなく、この村の人々だ。
エルダは怒りに震える拳を必死で押さえなくてはならなかった。
「まだ儀式には早すぎます」
「何故ですか、エルダ様！！」
「記憶をなくしているとはいえ、彼女は鋭い娘です。
いきなり儀式などすれば、疑って逃げてしまうかもしれません」
エルダは渦巻く怒りを抑えるかのように冷静に話し始めた。
村人たちは明らかに怒りの表情を見せたが、エルダが
美冬がいなくなるかもしれないと言うと、途端に大人しくなった。
「みなさん、今日はお帰りください。彼女に不信感を持たせないた
めにも、
彼女に何か言ったりしないように」
村人たちはぶつぶつ言いながらも帰って行った。
一人になり、エルダは悔しさのあまり涙をこぼす。
何故私は巫女などに生まれてしまったのだろう。
小さい頃は、そんなこと考えもしなかった。
ただ慈しまれ、敬われ、大事に大事にされてきた。

村の資源のことなど考えもしなかった。
　村の人達は、すべてがいい人だとおもっていた。
だが、成長していくにつれて、エルダは人の嫌な
部分をどうしても知らないでいられはしなかった。
　毎日のように詰めかける人々。
誰が少し多く食事を取っただの、誰が仕事をしなかっただの、
不公平だだの不平不満をぶつけてくる人々。
　村の資源に関してのことも、エルダは再三に渡って
村の人間に警告していた。
　けれども、村人たちは返事だけはするものの、
全く働こうとはしなかったのだった。
　子供だけでは、そんなに大した働きにはならない。
そうこうしているうちに、日照りや大嵐、
数々の災害が起こり、しだいに備蓄されていた
資源は少なくなっていったのだった。
　エルダは、それでも村の人間を守らなくてはならない。
自分だけは、最後までこの村に居続けなくては
ならないのだったーー。

第二十二話　～生神様の生活と村の不満～（後書き）

ついに村の全貌が明かされます。
何もしないで不平だけをぶつけてくる
村人に嫌気がさすエルダ。
それでも、巫女である彼女は
村を離れられません。
次回もよろしくお願いします。

第二十三話　～少女の記憶と巫女の想い～

相沢美冬（あいざわみふゆ）は今日も少女に
かいがいしく世話をされて過ごしていた。
痛いほどの視線を感じる気がするが、
振り返ってみてもそこには誰もいない。
と、ズキッと頭に痛みが走った。
「痛い……？」
「生神様！！　どうかなさったんですか！！」
少女が美冬の背をさすりはじめる。
だが、美冬は声を出すこともできないほどの
痛みに彼女を気遣うこともできなかった。
少女は今にも泣きそうな顔をしている。
美冬の脳裏に、同じ年くらいの女の子や男の子の
姿がよぎった。あざけるような笑みや言葉は、
彼女の胸を深くえぐる。
美冬はよろよろと立ちあがったが、その
顔はびっくりするぐらい青くなっていた。
「生神様、大丈夫ですか？」
「大丈夫、よ。少し寝ていてもいいかしら。
そうしたら良くなると思うから」
「はい、分かりました！！」
少女に支えられるように歩き出す美冬を、
なんとも言えないような顔でエルダが見つめていた。
エルダには分かっていた。自分の術が解けかけていることを。
（美冬……過去の記憶を取り戻したのね）
辛い辛い記憶、できることなら、思い出したくないであろう記憶。
ここまで思い出したならば、すぐに楽しい想いでも蘇るのだろう。
忘れたくなかった、大事な者たちの記憶も。

エルダは自分のことが良く分からなかった。
　このまま、ここにいて巫女を続けていいのだろうか、と。
村のために生贄を連れてきた。巫女としての務めを果たさなければと、
彼女の記憶を強引に奪い取った。
　私に、巫女として生きる権利などあるのだろうか。
村のために、罪のない清らかな少女を犠牲にしようとしている、私には。
　エルダは悲しげな瞳を伏せると、ただ涙を流した。
「母様、あなたなら、どうするのでしょうか。
　教えてください、母様……」
　すでに亡くなっているエルダの母が答えるわけはない。
それでも、エルダは語りかけるしかなかった。
　どうしたらいいのかが分からない。
このまま村を見捨てればいいのか、それとも、自分を
友達だと思ってくれた、心優しき少女を見捨てるのか。
　どちらかを切り捨てなければならない。
究極の選択だった。どちらもを選ぶことはできない。
　村には働こうとしないものばかりではない。
まだ幼い純粋な者たちがいる。
　村には未来がある。それを、捨てるのか。
考えても考えても答えはでそうになかった。
　どちらも大事だ。美冬には同情したことも
あって情が移ってしまったし、
ずっとここにいたのだから村人に対する
恩も愛情もある。両方を選ぶことは本当に
できないのだろうか。
　そもそも、本当に生贄になどしなくては
村に未来が来ないのだろうか。
　そんなことをしたら窮状は悪化するのではないか。

まだ、生贄にしなくても間に遭うのだろうか。
エルダは頭痛がしてきたので、それ以上考えるのを
やめて冷たいレモン水を口に含んだ。
自分が嫌になりそうだった。村のために、
心を殺すと決めたのにできそうにない。
神の声もどんなに念じても届いては来ない。
私も見捨てられたのだ、神に。
村の窮状など、村人のことなど、相談される
まで気づきもしなかった。
それは自分の落ち度。
巫女ならば村のことには目を配らなければ
ならなかったのに。
はあっ、と深いため息をつく彼女の背後に、
何者かの気配がした。
エルダはすぐに冷たい目になると
何も言わずに懐から取り出したナイフを
振り返ってその者につきつける。
巫女を廃しようと向かってくる者が
村の中にも、外から来たものにもいるのだった。
しかし、彼はそのどちらでもなかった。
手を挙げて武器は無い事を示す彼に、
エルダは雰囲気を和らげてナイフをしまった。
そこにいたのはカインだったのである。
「美冬を、取り戻しに来たの？」
「ううん、今日は、君と話をしに来た」
「話を？」
「うん、僕は、まだ君とあまり話したことがないから。
一方的に君を攻めたんじゃミフユに嫌われちゃうよ」
カインはエルダを殺すナイフを持つ代わりに、
手には甘い飲料水が入ったグラスを持っていた。

魔術で取り寄せたのだろう。
「よく、私と話す気になれたわね？
裏切り者の私と」
エルダは皮肉めいた笑みを浮かべた。
カインは何も言わず甘い飲み物に口をつけてから、
エルダの分も手渡す。
エルダは受け取ったが飲まなかった。
「毒は入ってないよ」
「そんなこと、分かってるわ。毒を使うくらいなら、
あなたは私を武器で殺すでしょうね。
私が憎くないの？」
カインは笑みを消すと音を立てて彼女の隣に座った。
エルダは驚いたように立とうとする。
その腕をカインが掴んだ。
「憎いなら、ここには来ないよ。僕は君を憎んでなんていない」
「大事な花嫁を攫ったのに？」
「君は、まだ美冬を傷つけてないから」
エルダは睨むようにカインを睨みつけた。
あなたに何が分かるのかと責める瞳だ。
じんじんと掴まれた手が痛む。
カインは息を吐き出すとまた飲み物を一口飲んだ。
手を掴む手が緩む。逃げようと思えば逃げられたけれど、
エルダは手を振りほどくことも逃げることもしなかった。
気持ちを落ち着けるために飲み物を飲む。
ホッとするような甘さが少し心を和らがせた。
「話をしようよ。君の事を、少し教えて」
カインの瞳にはエルダに対する敵意も悪意もない。
エルダはまた一口飲み物を飲むと、口を開きはじめたーー。

第二十三話　～少女の記憶と巫女の想い～（後書き）

ついに美冬が過去の記憶の一部を
思い出します。村を選ぶか美冬を
選ぶかで悩み続けるエルダ。
そんな彼女を、美冬の王子である
カインが尋ねます。
美冬たちはどうなってしまうのか！？
　次回はエルダとカインの中心の
話になると思います。

第二十四話　～魔法大国の王子と巫女～

エルダは彼に事情を話していた。
彼には自分を知る権利がある。
本当は語りたくなかったけれど、
エルダはすべてを彼に明かした。
カインは黙ってそれを聞いていた。
話し終えた時、エルダは彼が怒るだろうと
思ったけれどそんなことはなかった。
彼は一切怒ることはなく、それどころか
同情したような瞳をエルダに向けたのだった。
「大変だったんだね、君も」
エルダは責められる当てがなくなって焦った。
恥ずかしさのあまり死にたくなった。
どうして、こんな人達を騙したのだろう。
彼らは、優しい純粋な心を持っているのにーー。
でも、後悔したってそれはもう取り戻す
ことのできないことだ。
「責めないの？　私は、あなたの大切な
女性を誘拐し、なおかつ犠牲にしようとしているのよ」
「僕だけが、正義ではないから」
再び飲み物に手を出した彼の言葉は簡潔だった。
エルダもまた飲み物を飲みながら彼の言葉を待つ。
「村の人達には村の人達の正義が、君には君の正義が、
ちゃんとあるよね。だから、責めたりしない。
だからって、このままミフユを犠牲にさせたりはしないけどね」
「私、まだ、迷っているのよ」
「迷っている？」
カインの言葉はどこまでも穏やかで、エルダは彼にずっと

思い悩んでいたことまで打ち明けていた。
「私は、できればミフユを犠牲にしたくなんてないの。だけど、村を捨てることもできない。私の帰る場所は、ここしかないの。それに、村にはまだ未来のある子供たちもいる」
エルダは飲み物を置くと、膝を抱えるようにして座りなおした。小さい頃からの癖だが、自分自身では気づいていなかったりする。
深く考える時の彼女の癖だった。
「巫女様！！」
悲鳴のような声が聞こえたのはそのすぐ後だった。エルダもカインも驚き話をやめる。
叫んでいたのは、美冬の世話をしていた少女だった。
「大変です、巫女様！！　生神様が、生神様が、村の大人たちに連れて行かれてしまったんです！！」
少女の紅い頬には、殴られた後さえあった。彼女を守ろうとして殴られたのであろう。
「まだ私は指示をしていないのに」
エルダは苛立たしげに爪を噛みながら呻いた。自分で自分を責め立てたい気持ちに駆られていた。
村人の不満がたまっていたことを、エルダは知っていた。知っていて、何もしなかった。
だが、その結果がこれだ。
「ミフユ！！」
カインが血相を変えて走り出した。
エルダも、少女に「ここにいて」と指示を出して走り出す。両方に共通する思いは、ミフユが無事でいることだったーー。
美冬は考え事をしながらベッドに横になっていた。

思いだした初日はショックのあまり茫然としたものの、
しばらくするうちに記憶はなじんできて、嫌な気持ちは
するものの気持ちが悪くなったりはしなくなっていた。
ただ、記憶のはしに何かがひっかかっている
感じがして、思い出せない歯がゆいことがある。
自分に優しく声をかける相手の言葉が浮かんだのに、
彼の顔と名前がどうしても思い出せない。
思い出さなきゃいけない気がするのに。
彼は、一体誰なのだろうか。
「ボクは君がすきなんだ！！」
「ボクのことが嫌いでもいい！！　この世界が
好きじゃなくていい！！　元の世界で幸せに
なれないなら、ずっとここにいてよ！！」
言葉の数々に、真摯さとミフユに対する愛情が感じられる。
自分も、彼のことを好きだったのだろうか。
分からない。思いだせない。
だけど、思い出さなくちゃと言う気持ちが
少しずつ強くなっていった。
「生神様、お食事をお持ちしました！！」
そこにやってきたのは、美冬の世話係として
働いている少女だった。
美冬は体を起こして微笑むを浮かべる。
「ありがとう」
「一人で食べられますか？」
「ええ、大丈夫よ」
「あの、これもあたしが焼いたんです。
よかったら食べてください、元気が出ますよ」
焼き菓子のようなものが並べられた皿と、
りんごのおかゆのようなものを置くと少女は部屋を出て行った。
りんごのおかゆもどきを口にした美冬は、ひねくれた言動を

するけど仲良くしてくれた人魚の少女、アクアのことを
思いだした。他にも、この焼き菓子？クルリア？を食べ、
かかっている星の粒のこと、テレーズ、フィレンカ、シーレーン、
ルー、オリヴィア、ミステル、マリオン、出会った女性や男の子の
名前と顔が次々に浮かんできた。
　美冬は思わず流れ出た涙をぬぐうことなくお菓子をかじる。
どうして、忘れていたのだろう。
　優しくしてくれた彼女達、愛してくれた彼女達、
それを、自分はどうして忘れたりなんてしたのか。
　だけど、彼女はどうしても愛をささやく男の子の
顔と名前だけが思い出せないのだった。
　とーー。
「お待ちください！！　生神様は今具合が悪くて
ふせっている最中です！！」
「うるさい！！　何が生神様だ！！
　そこをどけ！！」
「嫌です！！」
　世話係の少女と、男性の声が聞こえてきた。
続いて、少女の悲鳴と何かがはじけたような音。
　少女が殴られたのだと気づいた美冬はベッド
から離れてすぐに部屋から出ようとした。
　しかし、男たちが部屋を乱暴に開け放つのが先だった。
「あんたには罪はないが、来てもらおうか。
俺たちはもう限界だ。あんたみたいな小娘に
貢ぐ料理の材料だってもうそこをつきそうなんだよ」
　にやにやと笑う男の一人が美冬の腕を取ろうとした。
世話係の少女がぶつかるようにしてそれを止める。
「生神様に触らないで！！」
「うるせえ！！　もう一度殴られたいか！！」
「やめて！！　その子に手を出さないで。

私が、行けばいいのでしょう？」
美冬は本能的に自分に死が迫っていると気がついていた。
この男たちは、自分を殺すつもりだ、と。
止めようとする少女に優しく笑いかけると、美冬は
男の手を振り払って彼についていった。
美冬はきづいていなかったが、彼らは罪もない
少女を殺すことに喜びさえ感じていた。
彼らが殺人者と言う訳ではない、この娘が生贄になる、
神様への供物をささげるのだという正当性が彼らの
罪悪感を消失させていた。
やがて、美冬の体にぐるぐるとなわが渡されていった。
美冬は祭壇の柱にくくりつけられ、身動きが取れなくなる。
彼のことを思い出せないまま死ぬのかと思うと、
悲しかったが自分に優しくしてくれた少女を、
これ以上傷つけたくなかったのだった。
火が放たれた。パチパチと火花が散る音が聞こえてくる。
それは美冬のはかされた靴を少しずつ焦がしていた。
その時ーー。
「ミフユーーッ！！」
飛び出してきたのはカインだった。止めようとする男たちを
投げ飛ばし、彼女の前にやってくる。
後ろにはエルダがいて、青ざめた顔でそれを見守っていた。
……あつい。炎はとうとう美冬の足まで到達した。
だが、美冬は彼の顔を見たとたん、そんなことはすぐに忘れた。
バラバラになったピースがかちりとうまくはまった時みたいに、
彼の顔と名前が浮かんできた。
美冬はようやく思いだせたことに涙がこぼれる。
「かい……ん……カイン！！」
「ミフユ！！」
だけど、もう間に合わない。自分は死ぬのだ。

それでも美冬は幸せな気持ちでいっぱいだった。
死ぬ前に、彼のことを思い出せたのだ。
「カイン、やっと思い出せた。
さようなら……大好き……」
炎がすそにまとわりつく。カインが彼女に
手を伸ばそうとした瞬間、炎がさらに猛り狂って大きくなった。
カインの悲鳴のような声が、炎の音にかき消される。
「いや、嫌よ、美冬！！　まだ、あんたに謝ってないのに、
話たいことだって、たくさんあったのに！！」
エルダの絶叫がその場に響き渡ったーー。

第二十四話　～魔法大国の王子と巫女～（後書き）

今回も遅れてしまい、見てくださっていた方
まことに申し訳ございません。
　後二話で魔法大国の花嫁様！？は完結いたします。
小説家になろうサイトで初めての完結作品になります。
次回もよろしくお願いいたします。

第二十五話　～救われる神の村と元生神の少女～

エルダはへたりとその場に膝をついていた。
生き物のような炎が、美冬を覆い尽くして
食いつくそうとしている。
カインも同じように膝をついていたが、
彼は彼女を救いだせなかった痛みに顔をゆがめていた。
がつん、と拳が地面に打ち付けられる。
何度も、何度も。地面に血がしみ込んでもやめなかった。
エルダはカインの腕を抑えつけようとして、
振り払われてその場に転んだ。
カインが青ざめて謝ってくる。
エルダは首を振った。謝るのはこっちの方だった。
自分がここに美冬を連れて来なければ、彼女は
こんな目に遭わないで済んだ。
自分が全て悪いのだ。
と――。
ぽつぽつと雨のしずくがその場に降り注いだ。
久しぶりの雨に、村人たちが歓声を上げる。
しかし、エルダもカインも喜んでいられる状況ではなかった。
大事なひとをなくしたのだ。喜べるはずもない。
「あっ！！」
声を上げたのは、誰だっただろうか。村人の女性か、
泣きそうな顔だった美冬の世話役の少女か、
二人には判別できなかった。
それでも顔を上げた二人の目に飛び込んできたのは、
なくしたと思っていた大事な人の姿だった。
美冬は燃えていなかった。多少服や体に小さなやけどは
負っていたものの、火の中で燃えていなかった。

何か光のようなものが彼女を包んで守っている。
「神様が、美冬を守った……？」
彼女がそう言った時、その言葉を肯定するかのように
雨が一段と大きくなった。村人はもう喜んでいる
ばかりではなく、必死に雨水を集めようとしている者もいる。
ひびわれていた地面や畑、田んぼも久方ぶりに
降った雨で潤っていた。
火が完全に消え、縄は焼け切られていたので、
美冬が二人に駆け寄ってきた。
「カイン！！　エルダ！！」
「ミフユ！！」
エルダは駆け寄ろうとしたけれど、あまりに慌て
すぎたカインがぶつかってきたので動きを止めた。
カインは美冬をしっかりと抱きよせて泣いている。
美冬も生きていた喜びで彼の胸に顔を寄せながら泣いていた。
「よかった……」
エルダは心からの笑みを浮かべると、雨をその手で
すくいながらホッとしたように座り込んでいた。
この村も、美冬も救われたのだ。
もう、悩む必要もない。
子供たちも、村人ももうお腹を空かせて
苦しむこともないのだ――。

エルダは、巫女をやめると村人に宣言した。
最初は驚きで声さえも出ない村人に、彼女は
笑顔でやりたいことを話した。
「もう生贄とか、そういうことは一切やめにしたいの。
畑をたがやして、田んぼの世話をして、巫女として
じゃなく一人のエルダとして生きたいから。
それに、神様はちゃんと私たちを見ていてくれたんだもの」

村人たちは反対しなかった。そして、エルダや神様、子供たちに今までのことをわび、二度と無精はしないと誓った。
こうして神の村の生贄事件は幕を閉じた。
帰ると言う美冬とカインを、エルダは最後に訪ねた。
「帰るんですってね」
「うん。皆も心配しているだろうし」
「また会いに来るからね！！」
カイン達の顔は、エルダをひとかけらさえも憎んでは いない顔だった。エルダはそのことが信じられない。
「なんで、敵の顔を見て笑っていられるの？
私、あんたを生贄に差し出そうとしたのよ。
罰されてしかるべきなのよ！！」
「罰するだなんて！！　それにエルダは敵じゃないわ」
「仕方なかったんだよね」
カインと美冬はあくまで自分を憎んだりしていない。
エルダは泣きながら彼らを馬鹿だと罵った。
罵りながら泣いた。最終的には、美冬に抱き寄せられてまで彼女はずっと泣いていた。
泣き終わった頃、美冬がようやく口を開いた。
「罰を受けるって言うなら、一つだけお願いをしてもいい？」
「別に出来る限りのことなら構わないけど……」
「私と、友達になって。あなたと本当の友達になりたいの」
そう言うと、エルダはためらったように顔を真っ赤に染め、再び「馬鹿」と呟きながら頷いた――。

第二十五話　～救われる神の村と元生神の少女～（後書き）

待っていた方、遅くなってしまってすみません。
ようやく前回の続きを書くことができました。
ここまで見てくださってありがとうございます。
あと二話で「魔法大国の花嫁様！？」は完結します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4973m/

魔法大国の花嫁様！？

2011年9月5日17時02分発行